

第6回芝不器男俳句新人賞

一次選考通過作品

- 1 象の背を象は知らない星祭
- 2 風音の映りこむまで墓洗う
- 3 円柱のなかの円錐門火焚く
- 4 登れない柱ばかりの秋の暮
- 5 自転車と星の自転の虫の闇
- 6 たつぷりと水を飲んだら鳳仙花
- 7 書き出せば桐の一葉の落ちるまで
- 8 秋風へ店名こする紙袋
- 9 文字化けをなんとか読めば秋風鈴
- 10 逆光のまま秋雲はほぐされる
- 11 いちじくは青を失う洗濯機
- 12 くるぶしはきゅっとしまって翳雲
- 13 落し水太平洋は星を容れ
- 14 月というべなうものへ爪灯す
- 15 火恋しへそから何もでない人
- 16 靴底の踏めない土地の鈴虫よ
- 17 踏切を忘れたときのきりぎりす
- 18 生活は熱にかすれる柿紅葉
- 19 閉じこめる壘は鳴るなり文化の日
- 20 風を追い風に追われる芒原
- 21 踊り場は冬めく光すくと立つ
- 22 鯛焼の影より鯛焼は剥がれ
- 23 終点のない道をゆく冬の雨
- 24 音楽と音楽の間の十二月
- 25 坂道の風枯れていて大使館
- 26 列島をかすめ鯨は闇へ向く
- 27 トンネルのなかにドアあり雪催
- 28 楽譜からマスクこぼれている無音
- 29 助手席へ雪入りこむ羽音かな
- 30 腋下へ体温計の寒さ差す
- 31 浮寝鳥ぶつかりあって人歩く
- 32 死者宛ての喪中ハガキや冬麗
- 33 映写機はマスクへ映す海の蒼
- 34 遅刻している外套を出られない
- 35 余震とは透明すぎる寒の皮膚
- 36 星を撃つ蛇口を下へ室の花
- 37 三寒の塔へ閉じこめた青空
- 38 枯野へと通じるバスの明るさよ
- 39 春の雪明るい焦げのオムライス
- 40 傷の多い眼鏡のレンズ木の芽雨
- 41 車椅子をふくらましゆく春の風
- 42 蛇穴を出て唇をはりかえる
- 43 看板の裏より木の芽風となる
- 44 百千鳥つきでるものはみな蛇口
- 45 花人となるまで虎の檻にいる
- 46 猿山に羽根のない日の花万朶
- 47 ちぐはぐな心へ注ぐ夕桜
- 48 西口は夜のまさった夜桜に
- 49 花疲れ豚肉くるむパラフィン紙
- 50 様づけの人と腰かけ万愚節

- 51 春泥をびっしりつけて新社屋
- 52 てっぺんはてのひら多く春の山
- 53 躑躅から改札までを鎖浮く
- 54 しゃぼんだま音は音からはじかれて
- 55 堇でうごく一歳児の心肺
- 56 蝶のからっぽを歓楽街と呼ぶ
- 57 蛍烏賊うすいレンズを向けあって
- 58 桃色のコンテナ積まれ春の空
- 59 ミサイルは落ちる雲雀とすれちがう
- 60 天井へ田螺の息を輝かす
- 61 春深し雲にめがねを置き忘れ
- 62 てのなかの糸少なくて春は逝く
- 63 理容師の手にギターだこ花は葉に
- 64 初夏や開け放たれる鳩舎の戸
- 65 保険屋のくみかえる脚えごの花
- 66 薫風はゴリラの胸をふくらます
- 67 薔薇を手に台詞ひとつもなく幕
- 68 通り過ぎようとした目へ緑さす
- 69 花みかん雨から雨へ移るとき
- 70 ゴールデンウィーク肉の赤を押す
- 71 静脈の騒ぐにまかせ夏の川
- 72 紫陽花を覆うは傘であったもの
- 73 人体はほの暗い昼かたつむり
- 74 ファの音の徴びる鍵盤ハーモニカ
- 75 梅雨の日のあんこを包む暗さかな
- 76 梅雨明けやひっくりかえすおもちゃ箱
- 77 座ったら見える泰山木の花
- 78 鉄琴の音ととのえば海開き
- 79 七月の新聞細く折っている
- 80 雲影は山まで続く夏休み
- 81 みなみかぜ建築学は垂れている
- 82 大空の開ける音や蟻這うと
- 83 影の淡いアイスクリームつみあがる
- 84 草刈れば国の滅びる音聴こえ
- 85 夏山へ前照灯をぶらさげる
- 86 蓮の葉の下は泥あるいは真水
- 87 雲吞をひとつ余らす夏の海
- 88 ばらばらの楽譜を漏れるひとしづく
- 89 胸の奥そのまた奥の夏木立
- 90 ベランダのはしからはしをひとり言
- 91 夏草を吸って吐いたら細りゆく
- 92 炎天の均衡たもつ工具持つ
- 93 河馬の息のべっとりかかる百合の花
- 94 前職の書類を捨てて蟬時雨
- 95 ラジオから異言流れる大西日
- 96 空重く麦わら帽子は傾いて
- 97 白熊をあふれる泡よ夏惜しむ
- 98 塩を振り続けていれば夏の果
- 99 夜の冷蔵庫のなかみと目が合う
- 100 夕焼はすべて廃刊夕雲も

- 1 天上へ繭のつらなり濡れながら
- 2 誰の忌か天上の鹿雨をもとめ
- 3 老いた海が不滅のQをもつ夜明け
- 4 花つばき流民か磐を断つものは
- 5 日本海に虻蹴り落とし悲しい事務
- 6 重い夜の霧猫が時計のなかで飢え
- 7 ビルに角笛燃えみなしごの悪さよなら
- 8 ゑ？と言い地下の鴨肉腐る誕生日
- 9 黙る詩人の虹の朝餉に乳が湧く
- 10 一瞬間(またたくま)の鶴のぜつめい青い紅葉
- 11 軍艦ようこそ暗黒山河に猿が生まれ
- 12 石柱に接吻すれば雨と蛸
- 13 火矢を放ち八百歳の猫の如し
- 14 沼には少年朝の壺には芋虫溺れ
- 15 三月の銀震えよ獣の舌煮るあいだ
- 16 狐の腸地に冷え百の蛾の羽搏き
- 17 ダリア園火傷以外に得るものなし
- 18 頭病めば荒地に蛭と金囊(かねぶくろ)
- 19 工具運ぶ者にエホバの太陽二つ
- 20 謙遜(へりくだり)のビルから赤い水着を落とす
- 21 花菖蒲天暗ければ臥し休む
- 22 白いビル椅子見せてくれ自爆のための
- 23 つぎつぎと鹿生る夢の花筏
- 24 十月の井戸くろぐろと海豚湧く
- 25 一億歳児の我に鶴の眼輝かず
- 26 曼陀羅の手前うつせみ時間を抱く
- 27 地の蝸牛割れ赤い蔵から男ら去る
- 28 俯く青年へ赤い雪降る鶴の保護区
- 29 青い蝶に機械(めか)打つ前の拳を見られ
- 30 車輪から蝶とびたてば牛糞れ
- 31 ハッカー群れて酔う砂浜の黒い扉
- 32 串刺しの驢馬の左右に朝の花火
- 33 斧の夜は鳥飼う者のみ腿撲られ
- 34 亀の瞳に曲がる太陽鳴り止む鐘
- 35 顔なし家畜ボタンを押せばなんでもできる
- 36 六階隅に鼠倒れ鼠を翠(みどり)の箱へ
- 37 凍った鳥握り両眼に糸の世界
- 38 車沈みわれらの内部の玉葱臭う
- 39 丘を呪う 湖心に黒い鹿が震え
- 40 燃える鶴二本の槍に貫かれ
- 41 脳内の金工の冬すぐに終わる
- 42 滅びよモネ 少年時代の蛇口とともに
- 43 髭を剃るとき桃と幾何学かなしい村
- 44 重い櫓黒くかがやく火葬の前日
- 45 森を泳ぐコピー機火を噴き猿をはじき
- 46 悪書読む夜の金槌を父に渡す
- 47 銃持たぬ老人に冬の楽隊果実のごとし
- 48 霧の海に顔燃え時代そらおぼえ
- 49 鮫の頭を載せる鞆(ブランコ)知人の忌日
- 50 床柱壁窓青い木餓えた鷗

- 51 ねじれた蛾の群れ 製氷のため肩組めば
52 横断歩道(ゼブラゾーン)の真下水死のドラえもん
53 牡鹿に触れわが眉も濡れ雨の銀山
54 菊枯れて鏡に白馬と菊と鏡
55 われの背後で金魚焼かれる樹海の演奏
56 紺の地球儀書斎に少女の眼球鈴生り
57 羅漢の罅(ひび)へ桃握るときその雫
58 撞木絞干され時計屋出口なし
59 蠅の奴隷のわれら百回(ももたび)欺かれ
60 チェロ裂けば蛞蝓がでて霧の庁舎
61 瑪瑙の上の蛇に雹ふる無臭の避暑地
62 蟹の葬失禁するほどに桜
63 焼経(やけぎょう)を双子眺める盲(めし)いても
64 餓えた猟犬に築城の夢終わり無し
65 牛乳商人燭光をあび冷えゆく薔薇
66 鐵の蓮ひらく真下の摩天楼
67 迷路閉じても猿の自慰千年目
68 月光の触手ダビデの鼻削る
69 青いうみうし捕らえ豪雨の磯となり
70 牛酪(バター)盗む少年に詩は翡翠のごとく
71 すれ違う卑語蝶となる白い街
72 土地なき我に蔓が尊く剥がれた鏡
73 菊に蜘蛛 二階の画家は火を描く
74 人曲(デカメロン)読み水底に針落ちる
75 銃拭く男に盛夏の巨石やがて瑠璃
76 ある雪原に墓のまぼろし乳房はない
77 漁夫の手に眼薬溜まり虹立つ古城
78 凍った檸檬とタイヤ片づけ世界無し
79 石の部屋チーズまみれの猿にも歴史
80 冷えた破鐘(われがね)に寝る玉虫に手術(オペ)の夢
81 饒舌(しゃべ)るなよ鸚鵡から詩が逃げてゆく
82 鐵の蠮螋にぎる乙女は可厭(いや)だ、可厭(いや)だ
83 人形(ドール)の眼を焼け蟹の基準を理解して
84 蕃椒(とうがらし)銜え夜四枚の鏡を売る
85 鶴を捌く大鎧より御声して
86 花ほどに狼餓えて橋震える
87 薬草を蛇泳ぎきる火傷しつつ
88 海のジャズ聴く六人は鰐を焼べ
89 凍死の山寂然(しん)と桃売りババア有難う
90 楽器は灰に少女は産まれるえなめるに
91 薙刀の前で狂えば亀に黒い息
92 不発弾空へ戻せば時代ずれ
93 盾持つ少女ら毛虫は鏡の上に震え
94 船にモルヒネ耳を失う刺繍少年
95 蓮の白い呪いは釘を思えばよい
96 霧雨の四方(よも)の熊より糞香り
97 静座して母に水母のちからが見えた
98 B-29埋まる荒野に桶と詩人を蹴る
99 雪原では瓶鳴るように時間生まれ
100 ああ膨張の木に油塗る白虎の再起

- 1 新しきノートに記名チューリップ
- 2 温泉の舐めて酸っぱき若葉かな
- 3 音といふかたちなきもののおじぎ草
- 4 コスモスを回覧板の話題とす
- 5 コスモスの中にしやがんで鬼を待つ
- 6 三輪車糸瓜の裏に仕舞ひけり
- 7 烏瓜ポストの錆の付きにけり
- 8 焼芋を二人で一つ買ひにけり
- 9 まつすぐに菊並べたる風呂屋かな
- 10 男湯へ話しかけたる紅葉かな
- 11 柿一つ切りてもてなす父と母
- 12 銭湯の椅子洗ひたる月明り
- 13 水澄みて切手のすべる葉書上
- 14 栗飯に合はせる箸を取りに行く
- 15 曼殊沙華教師僧侶に戻りけり
- 16 大根に煮干しの銀の付いてをり
- 17 冬の蝶弁当箱に止まりけり
- 18 河豚鍋と一枚板の机かな
- 19 焼芋の様子うかがふ軍手かな
- 20 法律の長き一文枯木立
- 21 鍋持ちて歌留多の横を通りけり
- 22 エプロンの母を混ぜたる歌留多かな
- 23 絵双六土鍋の横に仕舞ひけり
- 24 雪投げの間を母と通りけり
- 25 三角の団地の砂場鳥雲に
- 26 炒飯をれんげで掬ふ彼岸かな
- 27 春の水より伸びてくる亀の鼻
- 28 犬を飼ふ家族会議や朧月
- 29 市役所の二本の旗や夏蜜柑
- 30 れんこんの穴をとほりて春の水
- 31 牛乳瓶蝌蚪のとなりに届きけり
- 32 同じ味つづくドロップ蛙の子
- 33 泥の縁乾いてをりぬ桃の花
- 34 天窓によく動く雲卒業す
- 35 卒業や雨の匂ひのマリア像
- 36 桃の花スーツの襟を出しにけり
- 37 海峡に幾隻も船卒業す
- 38 水車ふと速くなりたる茶摘かな
- 39 鳥雲にシーツの面を替へにけり
- 40 刃物屋の店主に畳タ立来る
- 41 鯉節高く盛りたる西日かな
- 42 市役所にてんとう虫と入りけり
- 43 ぱきぱきと昆布折りたる簾かな
- 44 傘のよく褒められる日や花ざくろ
- 45 花石榴しづかに車動き出す
- 46 溝浚湿布一枚づつの膝
- 47 小包の湿りてをりぬ花ざくろ
- 48 家族みな歯をみがきたる葭戸かな
- 49 昨日よりよき父母の仲淹を見る
- 50 一列に淹の後ろをとほりけり

- 51 黒豆のよく光る日や葎障子
52 体操の指にふれたる夏柳
53 まづ甲にふれてはじまる夕立かな
54 合歓咲いて豆腐を包む薄布巾
55 三つ編を引つ張られた日金魚玉
56 茶封筒抱へて入る夏木立
57 父と来て隣の墓も洗ひけり
58 天の川聖書はみ出す制靴
59 踵より上る坂道墓参
60 朝顔や弁当に胡麻振りかけて
61 釣堀にあたりめ啜へたる男
62 虫干や膝立てて父眠りをり
63 水澄みて修道院の石畳
64 工場に流れる演歌天高し
65 精霊船指をはなれる力かな
66 かけつこの位置に付きけり稲の花
67 稲の花貨物列車の音つづく
68 柔らかき犬の関節稲の花
69 法師蟬円卓に酢のガラス瓶
70 法師蟬運動靴の中に砂
71 星月夜店をはみ出す帽子棚
72 まつすぐに茶を注ぎたる茸飯
73 銀杏の手で放りたるお賽銭
74 占ひを聞きたるあとの茸かな
75 末枯れてやかんの多き蕎麦屋かな
76 末枯れておしぼり固く積みにけり
77 重箱に詰める赤飯星月夜
78 風呂敷の結び目固しばつたとぶ
79 石けんを包む厚紙ばつたとぶ
80 へうきんにエプロン干され蓼の花
81 交番に貼り紙多しカンナ咲く
82 彼岸花残して鎌を使ひけり
83 干柿や干支一回り違ふ友
84 冬の月父の喪服を借りにけり
85 天ぷらの衣ぶ厚き七五三
86 天井の蓋の浮きたる十夜かな
87 パン屑を払ふハンカチ暮易し
88 きんつばの薄き衣やしぐれふる
89 スポンより軽きフォークやしぐれふる
90 商談に使ふ算盤石落の花
91 返り花おしぼりに湯の匂ひかな
92 赤本に挟む鉛筆日短し
93 男湯の暖簾くぐりて恵方かな
94 線香の束ほどきたる冬の水
95 二本目のマッチ擦りたる冬の水
96 音たてて水を飲みたる枯野かな
97 縁側でほどく風呂敷薄氷
98 座布団に犬眠りたる薄鬼やらひ
99 煎餅を挟む長箸薄氷
100 図書館の本抱へたる雪間かな

- 1 口蓋に退屈ばかりあって霜
- 2 小寒の誰として怒られようか
- 3 店内にいないショールを探してる
- 4 セーターを着ない非行で夜を歩く
- 5 山眠る手錠つめたいレプリカの
- 6 鮫鰯を吊る紐に肉めいたもの
- 7 接待をされてだれかの冬の波
- 8 立冬や竹刀ばきばき折れるゆめ
- 9 つかわれた鍋なのかしら社会鍋
- 10 オリオン座消毒液で拭いた皮膚
- 11 愛などとおろかに生きる冬の滝
- 12 ふくら雀もう一回と乞うてしまう
- 13 柚子ほぐすそれではわからない柚子湯
- 14 冬麗の長い腕から長い指
- 15 眼球を触ってはだめ十二月
- 16 全員がポインセチアを思い出す
- 17 イルミネーションひるまない手だと思う
- 18 枯芒から事実へとうつりかわる
- 19 すこしだけ手前にずらす落葉かな
- 20 寒林や語学の教科書捨ててある
- 21 ずわい蟹つまみをひねると音が出る
- 22 信仰はあるかないかで雪しまき
- 23 晴天の冬野じゃんけんみたいな葉
- 24 数え日の知らない駅に着いている
- 25 表面が擦れた白菜たかのぞみ
- 26 絵に描いた晦日蕎麦では食べられない
- 27 手袋の片手ふたつを使ってる
- 28 白日や鮫がゆっくり振りかえる
- 29 冬景色落ちてくる花嫁衣装
- 30 天井に天井の影年の内
- 31 飛行機のひかりの色や年の暮
- 32 しばれると封筒の糊はがしつつ
- 33 東京に川しぐれ降る川の名に
- 34 リノベーション団地むささび飛びやすい
- 35 写真ならあなたが写る寒牡丹
- 36 樹氷林手の内明かすように鳥
- 37 背が伸びて冬の雷には耐えられる
- 38 神無月逆円錐だと酒を思う
- 39 冬鷗錯視をつかっている階段
- 40 凍星やつながっている家と家
- 41 燦々と照り返す白鳥までも
- 42 試されてポインセチアと共に過ごす
- 43 冬の梅ないならないでいい小銭
- 44 エリツインと呼ばれる年忘のなかで
- 45 襟首に砂糖をつけて寒昂の子
- 46 愛をするあとの蜜柑を剥く時間
- 47 リュックサックに被される冬帽子
- 48 鯛焼の住んでいる街近いという
- 49 サイエンスフィクションが割る蕪かな
- 50 枯蔓や時効なくなる遡及して

51 冬の霧あなたはそのあとあなたなの

52 きらわれる予感水仙みずたまり

53 最愛の冬菜どの菜でもいいから

54 人参で殴れば折れるころかな

55 ふゆごもり自動車学校に教官

56 壁紙に描かれた暖炉さわない

57 悴んでいる転居する届出す

58 凍雲やデスクライト壊されている

59 短日のむかしむかしのでかい桃

60 冬深しチーズ食べすぎさせる濃さ

61 タレントをひとり寝かせて冬田かな

62 駐車禁止みみずくが一台ずつで

63 階段の折れ曲がり方寒波くる

64 煙草吸う鷺に見おろされつづける

65 湯豆腐を掬う試験みたいに掬う

66 雪だるま千もならべて家の跡

67 天体を回すつもりで初句会

68 血まなこの血に冬ざれのような気配

69 手羽先を折る冬の雷ふかく折る

70 冬銀河ひとに例えるおろかさよ

71 こなごなのナッツ残され初芝居

72 冬薔薇いつでも勝てるひとと思う

73 ありえることだけあるのかな夜の蠟梅

74 絨毯に転がってまだ冬苺

75 雪催ただしさの証明写真

76 ふぐぎっしり詰めた水槽ぶち割って

77 冒頭で言ったとおりに櫂がくる

78 切った毛を奥にしまわれ冬の夜

79 冬三日月ひくすぎる熱で成仏

80 駅前に象でかすぎる春を待つ

81 霜柱ちゃんとしている犬は白い

82 いつか見た鎌鼬は人だったので

83 青い球投げてガーター冬終る

84 火事そして焼鳥の串横にする

85 着服の知らせ感冒わたしまで

86 常連の皿に和芥子日脚伸ぶ

87 風花や土下座するとき顎を引く

88 兎いてあなたたちとはわけが違う

89 白湯ねむいままでいい冬の梅

90 寒鯉のおどろかすため持った色

91 魔法かけてくださいかかった牡蠣の殻

92 はやくなる餅搗に目をつぶる婆

93 氷柱折ることはひかりを増やすこと

94 金星が似ているだれに冬木立

95 両の手に鴨正面を向くように

96 葉牡丹に巻かれて朝になっている

97 冬の庭あたま大きい子が転ぶ

98 葛湯飲み登り坂だけあると思う

99 寒卵ひとりひとりの名前書く

100 まんなかを探して座る冬座敷

- 1 口拭ひ話しはじめし十夜かな
- 2 茶の花や粘りて落つる雨しづく
- 3 ガンジーの手の美しき青写真
- 4 初雪や眠る赤子の息深く
- 5 山眠る印度尊者の猩猩緋
- 6 夜焚火の音に遅れて火の飛べる
- 7 水涸るや底泥光りつつ崩れ
- 8 元日の山肌赫く母遠く
- 9 寒餅を切つたる音の短くて
- 10 竹馬のばらばらと地にたふれけり
- 11 雪沓の誰か揃えてくれてあり
- 12 麦踏や蔵の向かふのぼんやりと
- 13 なめらかに光をつなぎ春の雪
- 14 啓蟄や後ろ手に微笑んでゐる
- 15 首筋に力の入る田打かな
- 16 掃く人の椿壊してしまひけり
- 17 片足の潦水に触れ垣繕ふ
- 18 春うらら白壁ところどころ剥げ
- 19 朧夜や新しき膚出でてきし
- 20 囀りの老のかるがる働けり
- 21 やはらかく鳥は巣箱を出づるかな
- 22 大萵苣のばらばら外る水洗ひ
- 23 食堂のぽんと湯気吐く鉄線花
- 24 蔓外れ鉄線の首たよりなく
- 25 鉄線の頼りにしたる塀の穴
- 26 かたつむり肉をほとんど出し歩く
- 27 でで虫のぐぐとしまへる肉白し
- 28 田植女の大きな影を率いてをり
- 29 かがみたるまま歩みをる田草取
- 30 つつがなく地図覚えたる団扇かな
- 31 二十本ほどの白髪ソーダ水
- 32 文字のなか走り抜けをり雲母虫
- 33 夏瘦のおもはぬ大きこゑ出せる
- 34 あさがほの萎びて色の濃くなりぬ
- 35 ブラームス流して野分やりすごし
- 36 母親が虫籠覗きこんでをり
- 37 蟪蛄の喰みたるものを抱き直す
- 38 あを白く蝦の泳げる良夜かな
- 39 真緑の川十月の魚の群
- 40 一つ飛びたくさんの鯔飛び出づる
- 41 ピラカンサ石碑の文字に苔あふれ
- 42 挿し置きて表の決まる案山子かな
- 43 突き立てし案山子の襟を正しけり
- 44 糊あまくにほへる障子洗ひかな
- 45 山茶花や家の外より返事来し
- 46 金色となるまで大根洗ふとか
- 47 日晒しの底の四角き落葉籠
- 48 枯野より東訛りの戻りたる
- 49 口々に雨をたずねるおでんかな
- 50 マスクより人一枚の剥れたる

- 51 餅つきの老の一打の重たくて
52 初暦重たく壁に掛けてあり
53 初湯出て壮年の身になりけり
54 掌にふくらんである若菜かな
55 雪達磨乾びし枝の残りたる
56 艸魚忌や午後がまつたく暇であり
57 白魚の唇につかへて落ちにけり
58 水温む地蔵の頭ざらざらと
59 春水や蟻の争ひ短かかり
60 打ち終へし畑を渡る畑打
61 屋根替の降りて集まる湯呑かな
62 虚子の忌の冷たき水を飲みにけり
63 正座して足のはみ出す日永かな
64 永き日の黒鍵白鍵より軽く
65 春の子や花の名前をよく覚え
66 鳥の巢のあたたかさうに落ちてある
67 種蒔のゆつくりはがす蹠かな
68 大学の伸び切つてある花薊
69 行く春や水没の虫静かなる
70 水筒のすぐそこにある袋掛
71 掛けてあるだけの麦藁帽子かな
72 浅黒き十指李を並べたる
73 腕一本飛び出してある葭戸かな
74 うらがへるてんたう虫の腹黒し
75 路角に涼しく貌をこする猫
76 心太赤子の首に皺多し
77 立ち泳ぎ涼しき顔で待つてをり
78 瘦身の遠泳の水引きずれる
79 鹹きかひな吸ひをる水着の子
80 向日葵や小さき家の水の音
81 葉脈の白さ八月十五日
82 いつまでもひとり愉しくいなびかり
83 足首のつめたく花野ゆきにけり
84 仏滅のしずかに昏れし鬼胡桃
85 人肌の触れて離るる虫の闇
86 竈馬ごとと襖を打ちにけり
87 雁瘡や紙をやさしくつまみ上げ
88 亀甲の爆ぜて石榴のあふれけり
89 蘆刈の両手で蘆に潜りゆく
90 伸びてある木賊と折れてある木賊
91 忘恩やぎんなんひとつ音打てり
92 神の旅耳に明るき風過ぎて
93 冬晴や茶器積み上げて叩き売り
94 弟の気前よかりし十二月
95 長梯子立て掛けてある枯木かな
96 焼膳の割られしままに置いてあり
97 ラガー等の握り拳のまま入場
98 読初の紙やはらかく黄ばみけり
99 櫻木の影を明るく雪達磨
100 弁当をさらりと解く氷かな

- 1 原題は簡潔であり冬銀河
- 2 瞬きに使ふ筋肉枯木立
- 3 梟はどんな名前が似合ふらむ
- 4 冬の星ゴッホの帰り道照らす
- 5 先生の最後の生徒冬の虹
- 6 口開けば白息横へ流れゆく
- 7 冬泉つられて声の小さくなる
- 8 馬小屋に二人でゐたる冬日かな
- 9 暖房や静かな人と気が付きぬ
- 10 葱選ぶとき寂しさをおぼえたり
- 11 何を見る必要ありや鯨の目
- 12 存在を証明したし雪を踏み
- 13 パレードにあと戻りなし冬の星
- 14 鍵穴の鍵とうに失せ冬の水
- 15 外套のまま鉛筆を走らせる
- 16 寒林を先頭の入れ替はりつつ
- 17 野心なきひとに今年の雪降れる
- 18 冬の蜂資料ケースのなかに死ぬ
- 19 管理人室より雪を見てゐたり
- 20 聖夜なり電話ボックス撤去され
- 21 狐出る電線ほどにおとなしく
- 22 ボストンの姉妹都市にも雪降り
- 23 眺めをり時計回りのスケート場
- 24 高くなり誰も困んでゐぬ焚火
- 25 何処からか来る鳥のこと初日記
- 26 日脚伸ぶ曲を流さぬ太極拳
- 27 節分の小学校に鬼が出る
- 28 砂糖壺倒るるやうに春来り
- 29 鳥もする一人遊びや梅の花
- 30 たんぽぽや時計を持たぬ子供たち
- 31 春めきて育ちざかりの競走馬
- 32 ふらここの顔見合はせて漕ぎ出せる
- 33 あたたかや双眼鏡にかるく酔ふ
- 34 旅をする相手の変はり春の雲
- 35 切株はまだ木を思ふ春の雨
- 36 風車回れるものを渡したり
- 37 チューリップ机離れたすきに咲く
- 38 風船の大観覧車より高し
- 39 門のなき専門学校さくら咲く
- 40 何か失ふ空から鳥の巣へ戻り
- 41 手のひらをあくびに添ふる八重桜
- 42 おどろいてあげる手品や桃の花
- 43 巣箱作るとき鳥の小ささ思ふ
- 44 春泥の靴跡脳裏にもつきぬ
- 45 みな島の主のやうに花筵
- 46 牛乳をしまひ忘れし春愁
- 47 処方箋手に持つてをり夕桜
- 48 ゆく春の最後ばらまく鯉の餌
- 49 減つてゆく蝌蚪に別れのとき近し
- 50 春惜しむすぐに大きくなる熊と

- 51 全集は腕の長さ五月来る
- 52 手紙なるもの思ひ出す若葉かな
- 53 弟を庇ふ兄ゐる青嵐
- 54 フレークが牛乳を吸ふ梅雨入かな
- 55 さみだれや切手に重さなきやうに
- 56 平日の宿に過ごせる桜桃忌
- 57 下校する上級生の涼しさよ
- 58 席取りのハンカチふはと置かれたり
- 59 大人には気づかれてゐぬ毛虫かな
- 60 熱帯魚二度寝の出来ぬ夢に覚め
- 61 夜濯やもうすぐ終はる誕生日
- 62 子供らの浮き輪したまま上陸す
- 63 漏るるなり水鉄砲のどこかより
- 64 エンジンの止みし船より泳ぎ出す
- 65 海遠き町で水着を干してゐる
- 66 審判のゐないテニスや夏の雲
- 67 昨日ゐし鳩かもしれず炎天下
- 68 鳥籠に清貧のあり夏の朝
- 69 草いきれ犬が粘りて骨もらふ
- 70 クーラーや画鋏のとれし世界地図
- 71 ぶつかつて硝子を知らぬ金亀子
- 72 形代に記す名前の他人めく
- 73 耳栓を鞆に入るる帰省かな
- 74 大夕立家族全員濡れてゐる
- 75 夏瘦のあちらこちらに鏡かな
- 76 違ふ部屋からナイターに耳澄ます
- 77 蜘蛛の巣の蜘蛛去りし後永からむ
- 78 記憶とは夏蝶ふいに止まるさま
- 79 腕時計現地時刻のまま残暑
- 80 臨界のサンクチュアリに鷗の立つ
- 81 高校を出て写真家や天の川
- 82 野球部の去る時静か翳雲
- 83 赤とんぼ空の入り口あるらしき
- 84 駄菓子屋の奥は住まひや秋の昼
- 85 留学生集うてゐたる良夜かな
- 86 小さき子小さき鹿に餌をやり
- 87 秋雨や海月の寿命など思ふ
- 88 幸福の導く先の林檎かな
- 89 小鳥来る日本名持つ宣教師
- 90 やはらかき土に出くはす蟻蛭かな
- 91 秋の雨世界は少し受動態
- 92 陽へ出でて見失ひけり秋の蜂
- 93 月へゆく近道ほしき雑居ビル
- 94 秋霪雨もぐらの吐息熱からむ
- 95 冷やかや誰かの開けてくれし門
- 96 図書館は目の合はぬ場所鳥渡る
- 97 秋ゆけり車を手放せるに似て
- 98 朝寒や人を久しく乗せぬ馬
- 99 美化するを禁ずるごとく水澄めり
- 100 標本に透明な糸冬近し

- 1 初雪のほろびやすくて絵は無題
- 2 あやとりの糸の一本金糸なる
- 3 寒晴を来て落胤のやうな顔
- 4 絵の中をひしりと寒鯉のとほる
- 5 コルセットの痕ほの赤し冬の芹
- 6 みなひらく春暮の貝も雛の眼も
- 7 ブラウスのボタンうすくて蓬摘む
- 8 藤房の吹かれてあはき花の裾
- 9 花冷やフルーツサンドやすませて
- 10 散瞳の底まで届く紫木蓮
- 11 フルートを溢れて夏霧となりぬ
- 12 蛍袋かぶせ記憶のきれぎれに
- 13 水羊羹のなかに棲みたる遠さかな
- 14 落飾の夢より醒めて日雷
- 15 脱ぎきつてまぶしい素顔草の花
- 16 雨はすすきへ一線を引くときの意思
- 17 鶏頭の血族といふ厭はしさ
- 18 抑圧のざらりと梨へ刃かな
- 19 晩白柚撫ですり替へてみたき首
- 20 相談を吸ひ取り終へし菊枕
- 21 立冬や玻璃は集めて伏せられて
- 22 ほんたうのこと云ひたがる葛湯かな
- 23 いつせいに魚影の流る冬障子
- 24 遠き夜の父を弑する窓の雪
- 25 雪のあと螺旋階段やはらかし
- 26 塗り替へる塗り絵の空や雪籠
- 27 貝ほどにかかる手のひら冬陽炎
- 28 あやとりをめぐれば晴れて昔の字
- 29 身の裡に寒鯉のみて重たしよ
- 30 凍天を雲濁しゆく破水かな
- 31 水に触れみな白鳥となる遺伝
- 32 雛の日の水琴窟の鳴り止まず
- 33 早蕨の私語するやうに伸びにけり
- 34 落ちながら謀反のにほふ白椿
- 35 調律師来たりて躑躅濃くなりぬ
- 36 たましひのいづれ堇の砂糖漬け
- 37 うつし世を幾重にも見てねぢあやめ
- 38 濃紫陽花ふたりの母の暮らす家
- 39 ルビすべて震へはじめるみどりの夜
- 40 父の日の家荒れ果てて星の棲む
- 41 冬瓜のふつふつと怒られてをる
- 42 月天心浮世絵に影なかりけり
- 43 おさなごの肋骨柔し稲光
- 44 人参を抜き戦争を始めたる
- 45 ぬばたまの夜の錘として鯨
- 46 籠められてみたし鯨の心臓に
- 47 狼を百ほど飼つてひとりきり
- 48 餅花や曲線のふれ合へば点
- 49 絶体絶命霜夜のリンツチョコレート
- 50 針幾本失くして遠火事の匂ひ

51 蠟梅のほころび下まつげが長い

52 菜の花や筆跡うすき男の子

53 フラミンゴねぢれるやうに寝て日永

54 声帯のだんだんかはく白躑躅

55 三色堇まばたきにまはりだす

56 春蟬を解いて織きピンセット

57 濃く影は五月の玻璃をつらぬける

58 藤椅子におほきな夢を飼つてをる

59 プレパラート重ねて鳴らす涼しさよ

60 立体や浴衣は円き芯を得て

61 生贄を立てる熱狂パイナップル

62 蛇衣を脱ぐや謝罪のむつかしく

63 会はぬとき淡くなるひと鰯雲

64 のうぜんの溢れて終はる変声期

65 ひとの部屋借りて百年西日吸ふ

66 清秋やOのつらなる時刻表

67 露けしや肺ほころびて彫金師

68 なめらかに月を象る手のかたち

69 ジョーカーにジャックかさなる良夜かな

70 自由なる小鳥の骨は拾はれず

71 おくゆきや薄雲は日をいたはりて

72 唇の皮ぴりと剥き鰯起

73 軽口を叩ける上司実南天

74 寒牡丹ひらいて歯車を落とす

75 睡る間は冬の泉に戻りけり

76 探梅や水面は雲をゆるく溶き

77 目に文字のとほる時間や鳥雲に

78 蛇の子の置かれて疑問符のかたち

79 貝たちに砂を吐かせて花の夜

80 春雨の粒も輪廻の半ばなる

81 春闌けて深く臓器にかける糸

82 手のひらとはくれん換えて貰ひけり

83 万緑といふかすかなる敵意かな

84 メレンゲの清かにならび夏始

85 実直にして悪人や鉄線花

86 静脈に薄羽蜉蝣沿ひにけり

87 玉葱を剥いてこの世の外へ出る

88 白玉や生前のこと忘れさう

89 涼しさや鏡は湖を含みをり

90 波音を聞かせて織られ羅は

91 削ぐ前の桃暗がりへ浸しけり

92 ラフランス淋しきときは歯を磨き

93 枯園へ鉄打つてきし体来る

94 降参の背後狐火だらけなり

95 寒卵並べ替へれば納得す

96 うつとりと霧の溜まつてゆく客間

97 兎狩してまばたきは小さき死

98 晴れきつて無敵松葉が陽にひらく

99 夕東風のなかに喪ふ切符かな

100 水の春ドアノブはドアつらぬいて

- 1 春や昔隕石(めてお)が龍を塵(みなごろし)
- 2 精神の廣大無邊を田螺倦む
- 3 龜鳴くや氣海(えーてる)を旅(ゆ)く時間の矢
- 4 白梅の捻れびらきや氷りつつ
- 5 梅咲くや僧叱られて快樂顔
- 6 囀や翠ときをり紅に
- 7 戀猫と一萬圓と似非易者
- 8 鶯や頬に谷造(な)す涙川
- 9 鳶湖上雨と疑ふほど霞む
- 10 蝶も夢老子も夢やウキスキイ
- 11 屁てふもの使途(つかひみち)なし春の晝
- 12 山に憑く春夕焼や壺に味噌
- 13 啓蟄や火星にも地震あんなりと
- 14 君が居にいつも虻をり名與へむ
- 15 耳は貝卒業式を少し寝て
- 16 學位記や夜櫻樹下に一人酌み
- 17 折紙の禽獸に春闌けにけり
- 18 情慾や空に花粉の河のあり
- 19 百千鳥佛像の魔羅淺く勃ち
- 20 水の世に椿童子と愛し合ふ
- 21 英語讀本(リーだ一)に冒險譚や燕
- 22 星や風算(よ)み旅(ゆ)くつばめつばくらめ
- 23 峠にて朝寝夕寝や團子と茶
- 24 太陽も鬱どきなりや籠の雉
- 25 囁(つつめ)きは口唇(くち)の快樂ぞ鬱金香(ちゅうりつぷ)
- 26 見えてみぬ虹の氣配が明敏(あから)さま
- 27 あひ觸れあはず薔薇の蝶風の蝶
- 28 蠶豆の笑まひて跳躍(と)ぶを幻視(そらみ)たり
- 29 夏筍を提げ人様の夢に出る
- 30 苔龜も花咲く頃か逢ひに來よ
- 31 ピアノとは誰れが棺か晝螢
- 32 在廊の畫家のはにかむ金魚かな
- 33 短夜や繪の中へ逃げ繪盜人
- 34 死穢溜めて都市美しや水母の觸手(て)
- 35 戀文も文字化けの禍や竹簾
- 36 赤鱗や海にもありて飄(つむじかぜ)
- 37 前(さき)の世を忘卻(わす)れ風鈴として鳴る
- 38 金魚來よ圖書室守の頬杖に
- 39 松風や夢も現も紙魚太り
- 40 鯖壽しの鯖釣る夢も百日目
- 41 冷茶(あいすてい)味濃く出たりフス火刑
- 42 草いきれハイデツガーは壽(いのちなが)
- 43 虹鱒を釣らば虹さう信じゐき
- 44 樺一樹四方雲海の照り返し
- 45 杉越しの日輪太り夏燕
- 46 水へこみあり水馬の脚の先
- 47 ひまはりの長はなびらの先の蟻
- 48 湖國にて晝寝の神となりにけり
- 49 一と夏の無爲のうれしき火星かな
- 50 おもへらく猯も夢みむ夏大根

- 51 うつつ食ふ猯は殺さむ西瓜糖
52 月光(つきかげ)を織り布(し)く路をよぎる猫
53 かの眠猫(ねむりねこ)へ月の手夥(おびただ)し
54 土葬して川輝くや西瓜村
55 水澄みてをりけり犬のちんぽこ朱
56 鈴蟲や君が寢部屋に樂譜山
57 秋蟬や金色ならむ佛陀の屁
58 水澄みて毛澤東の廣額
59 かの山の大山芋を褒め疲れ
60 佛映畫颪風の夜をもて餘す
61 秋薔薇や肛門恍(くわう)として開く
62 窗邊とは光の渚小鳥來る
63 電話魔も魔ものとおもへ秋晝寢
64 蠅螂の俱喰癖に博士號
65 星の夜の確率に牌起し伏す
66 流星の冷たく火(も)えて土龍の死
67 寶なく古墳安けし赤蜻蛉
68 夕暮や鶉溶けたる潦(にはたづみ)
69 月光に折皺なけれノオトに詩
70 神以前無なりけり夜の翳雲
71 鳥渡る地球に人は放飼
72 木犀や馬にもありて涙癖
73 釣り上げしそばから鯊を蔑
74 とろろ面(も)に醤油浮くなり球のまま
75 夜の阿蘇山(あそ)とろろ泡噴(あぶ)くは音も無し
76 水徐々に冬や鏡も像緊(し)めて
77 もいちど來よ冨サアカス獸連れ
78 やまあらし親密(なかよ)し冬の遠暴風雨(とほあらし)
79 百貨店(でぱーと)の柱の卷貝(かい)よ雪豫報
80 月の光暈(はろ)凍てつき猫の艶天與
81 納豆の絲に納豆ぶら下がる
82 納豆の泡噴きをり飯に載せしのちも
83 糞(ま)るうちに時雨廁となりけり
84 積讀の幾斜塔爲す寒下宿
85 自慰すれば部屋の醜禽寒く哭く
86 原發の電氣を消費(つか)ふ炬燵かな
87 三島忌やパンツの中へ幾夢精
88 蒙古斑沖の鯨と交感す
89 暗渠都市終日(ひねもす)くぢら廻流(めぐ)りゐむ
90 マント被り紅海渡渉する列へ
91 いつぞやの蒼彗星も古日記
92 初空をゆくキルスにも旅情(たびごころ)
93 人棲めば有穢や凍蝶旅團なす
94 日が氷りつつ差しゐたり籠(こ)に雲雀
95 言語野の太虚(そら)氷るなり禽(とり)の影
96 枯蘆や思惟が星座を造形(つく)りあげ
97 輕雪蟲重雪蟲よ觸れ飛べる
98 寂漠が星辰(ほし)に窮理(きは)まり枯木原
99 冬の僧獨り星間徒涉(かちわた)る
100 僧乗せて飛ぶ座蒲團(ざぶ)のあり冬銀河

- 1 引鶴や2オクターブの胸騒ぎ
- 2 胎内を囀り続く冬雲雀
- 3 胎の子の愛注ぎ合う桜狩
- 4 泣く子抱き鏡曇りて湯冷めかな
- 5 飛魚の羽をむすんでひらいては
- 6 ホタル飛ぶ善のカルマの光かな
- 7 食積やうっとり宿る神の前
- 8 親の眼の梁木知らぬ梅雨の月
- 9 短日の駅へ駆ける子いつもの子
- 10 富士を撮る父の手袋温いまま
- 11 吊橋の鳩を手名付け二月尽
- 12 春来る青一色の積み木積む
- 13 足軽くクレッシェンドの半夏生
- 14 晴れ渡る空一面やテント留守
- 15 四股を踏む光集う今日の月
- 16 秋の空靴を揃えてホバリング
- 17 梅雨の月燃えたる究理隠しけり
- 18 床泳ぐ蛇追いし子は眠られぬ
- 19 乳与へ目つむる稚児や髪洗ふ
- 20 七夕や咳を梶葉に隠したり
- 21 開脚し青き架線に熟れ葡萄
- 22 十月の右向く子らに汽車来る
- 23 未来図をなぞる枯木や握る君
- 24 育休は必死に愉快的雲の峰
- 25 朝顔や胎子の記録縷のごとし
- 26 悴める手に越南の詩よ隠れ
- 27 ブランコや午前十時の南溟へ
- 28 実らんか種蒔き中の一歳児
- 29 永き日の雲突き抜ける速度かな
- 30 時差のある二国間から亀鳴けり
- 31 鐘霞む令和迎える響きかな
- 32 もうすぐねと胎動返し卯浪立つ
- 33 六月の四分間に二児の母
- 34 裸子の魔法が解ける風呂上がり
- 35 朝顔に競う双子の哺乳瓶
- 36 初便り天狗の教え長江の途上
- 37 旧正の色鮮やかな鯛おこわ
- 38 春昼や祈る夫の後に次ぐ
- 39 父便りぴくっと背筋春の朝
- 40 鉛筆やアルプスまでの避暑散歩
- 41 乳白にぼかす水滴新茶かな
- 42 安南に放つ蓮の香天恵や
- 43 プルメリア頂上に待つ夏の夕
- 44 雨上がりメコン皮座すバナナかな
- 45 向日葵や光を奪われ泣いている
- 46 李国師(リー・くおつくすー)弥勒菩薩に柿熟す
- 47 金鼓の皿二輪が運ぶ翳雲
- 48 初時雨エコーに映る我が太陽
- 49 越の町除夜の鐘とはバイク音
- 50 六色の木の芽が繋ぐ世界の輪

- 51 春雨や静けさ包む母の黙
52 春疾風搔き立てクラシック刻む
53 千円の四隅に春の虹かかる
54 青緑二つのおくるみ縫いうらら
55 太陽の双子俊英に建つ若葉
56 万緑や真っ直ぐ宙へ颯爽と
57 産声の披露滴る涙かな
58 一針に込める愛こそ雲の峰
59 梅雨に入る肌着と哺乳瓶あまた
60 大海へ漕ぎ出す吾子を南風が押す
61 月白や礎築く東照宮
62 星月夜拳に秘めた塵こそ宝
63 星飛ぶや八百号の記念旅
64 大晦日妹の殻破く夜
65 春暁の母のミントを摘みし吾
66 定まらぬ移住地揺るる蛙の子
67 土踏まず無き十センチが青き踏む
68 春の湖笑い上戸の双子波動
69 強風の三保を見下ろす鳶かな
70 ラソラレと鍵盤指して山開
71 素盞雄の茅の輪くぐりし赤き空
72 待ち切れず驟雨のあとの滑り台
73 朝顔や輪廻を信じ花閉じる
74 屑籠をひっくり返す流れ星
75 橙の月や曼怛羅傾けし
76 蛇穴に入り数式の鬼来たり
77 口づけし黒鍵瞠る文化の日
78 寒暁の糠床の中あたたかく
79 最北のグリコーゲンの牡蠣茶漬け
80 白晳の天使が止まる鴛鴦の園
81 満目のコールドムーン燦とあり
82 初霜や知力の曙光突く扉
83 三輪車押しては引いて帰り花
84 冬うらら咄嗟に鳩と両想い
85 泣き止みしタンポポ育つ途中かな
86 沈丁やダイオードのごとく一途
87 花冷えの黒ガニ振るうカゴの底
88 春光の蟻やわらかに捧ぐ愛
89 罌粟の花無骨な線をなぞる指
90 青空に月と白梅重なりて
91 天日に未来図渡す鯉幟
92 左右の手に蒼き紫陽花より雫
93 呼応する水馬流る水面かな
94 黒き眼のイカの虹彩揺らぐ梅雨
95 冷房に迫れり嬰の髪ひなた
96 夏雲やニューロン繋ぐ三輪車
97 名月や分子機械にあいうえお
98 あちこちのうぐいす隠る樹冠かな
99 冬天に黒船残る眼の揺るぎ
100 近未来笑顔と癒しのレモンかな

- 1 ビタミンの生まるるからだ春兆す
- 2 野火自在風の悪魔が唆す
- 3 玄関の監視カメラの猫の恋
- 4 永遠の火の海をゆく絵踏かな
- 5 ロンドンの労働者街クロッカス
- 6 神様の一本釣りや揚雲雀
- 7 約束は握手が堅し麗けし
- 8 風船の番を勤めとしてゐたり
- 9 伊勢参おほらかな松おはしけり
- 10 蜷の道ゆく蜷なしに暮れてゆく
- 11 腹の虫手懐けてをる日永かな
- 12 草の根の迷ふが楽し春の土
- 13 亀だけに聞こゆるやうに亀は鳴く
- 14 のどかさに枕二つのベッドかな
- 15 考へもなく蒲公英の架を吹く
- 16 物心付くまでの世はかぎろへり
- 17 帆船の生まれ変はりとしての蝶
- 18 雛の日や竹の子族も人の親
- 19 紫雲英田や地獄を笑ふ友とをり
- 20 一步目の足跡深き干潟かな
- 21 蜃気楼第一話から見てをりぬ
- 22 吹けば飛ぶやうな新入社員かな
- 23 花散るや風の縋れを風が解く
- 24 闘牛の尻の尖先競り上がる
- 25 口コミで話題の春を惜しみけり
- 26 大輪の冷し中華の他はなし
- 27 木曾の水まろやかに湧き大鰻
- 28 日本の断面を滝落ちにけり
- 29 毛虫燃ゆ生身の影が動きつつ
- 30 起し絵に金色堂の現るる
- 31 虹立ちて東京よりも奇抜なり
- 32 蠅取器蠅の時間の流れけり
- 33 日本は金魚を死なすほど平和
- 34 黒麦酒注ぎ暮色を焦がしけり
- 35 友達の友達にゐるごきかぶり
- 36 お互ひの眩く看取り蚊遣香
- 37 罪と罰それから父のアロハシャツ
- 38 人心を治めてよりの田植かな
- 39 仲人としての人生さくらんぼ
- 40 水際へ風を呼びをる花藻かな
- 41 水喧嘩次第に水を遠ざかる
- 42 世の隅に匿はれたる螢かな
- 43 ナイターや覚えて帰る背番号
- 44 コーランの中の国々喜雨来る
- 45 水着著て水を戸惑ふ少女かな
- 46 この顔は芸能通のサングラス
- 47 水割を覚えてたてなる熱帯夜
- 48 靴底を噛むアスファルト真炎天
- 49 文明を脱ぎ捨ててゐる裸かな
- 50 納得のゆく向日葵の丈と成る

51 行先は晴れの祇園や白芙蓉
52 燦々と石英の透き涼新た
53 桐一葉ひかりを躲しつつ落ちぬ
54 頑なにこぼれざりけり稲の花
55 神童もいまや仙人生身魂
56 身籠るは抱くに似たり白桔梗
57 安産の腰が西瓜を運びたる
58 道長の月おどろかす大文字
59 鋼鉄が鋼鉄を刺す秋出水
60 鶏頭の起ちて達する過半数
61 鯽突き一縷の水の破れざる
62 夜学生何も言はずに隣り合ふ
63 恋やがて小説となる月夜かな
64 一国を見廻すごときいぼむしり
65 晴々と空輸されをリラ・フランス
66 海原に喰はるる勿れ鰯引
67 流星が星座を崩すまで降り来
68 鮭のぼる海を離れてより捨身
69 裏庭の裏の通草を挽ぎにけり
70 十六夜の机が回るミステリー
71 戴冠の座の仄暗き葡萄かな
72 ひく糊の光の薄さ障子貼
73 流木が根を持つてゐる雁渡し
74 地芝居の鬼呆気なく封ぜらる
75 一缶の珈琲奢る夜業かな

76 蟪蛄の住処もろとも枯れにけり
77 山茶花の一重の花も戻らざる
78 スポーツ紙腰に差したる酉の市
79 木の葉髪力足りなき寝癖かな
80 帰り花いのちが御礼してをりぬ
81 口切や大路貫く比叡風
82 千々に枝くだけて牡丹焚火かな
83 これからの景気の話おでん酒
84 凍蝶のいま融点の震へかな
85 玉子酒正座がしゆんと小さくなる
86 鶴といふ一筆を地に起しけり
87 寒菊の白は鱗のごとく透く
88 未だここは殺人現場雪が降る
89 世に口の戦争があり風邪薬
90 鮫鰐の己がよだれに溺れたり
91 寄合のやじ方々に狸汁
92 熊打の熊に怯まぬ眉間かな
93 牡蠣飲んで大往生の腹積もり
94 徒歩圏の世間話や大根焚
95 恩に生き縁に遊ぶや賀状書く
96 クリスマス雨の銀座の純喫茶
97 真つ黒にピアノ磨かれ避寒宿
98 大寒の雲圧し合ふや壇ノ浦
99 鬼やらひ鬼より豆の暴れたり
100 白鳥の生きて遊びの恋はなし

- 1 石蓐搔く鳶に尻を突き出して
- 2 社歌弾む海苔工場の屋上に
- 3 風に首晒して雛を流しけり
- 4 雛の壇数へてをれば名を呼ばる
- 5 信号の色のフルーツサンド春
- 6 的の矢を抜いて戻るや揚雲雀
- 7 十人の観光大使諸子売る
- 8 渦潮に集ふあらゆる目の力
- 9 岩と岩繋いでゐたる田螺かな
- 10 マグカップの計量目盛り春の風邪
- 11 子雀発つ土塊をやや窪ませて
- 12 ヒヤシンス塾の受付口低し
- 13 全室に工事の通知初桜
- 14 トスを待つ手の三角や水温む
- 15 掬へば零れ掬へば零れ瀬田蜆
- 16 中国茶熱湯に淹れ春霞
- 17 囀りの中に点呼の続きをり
- 18 鳥の名か子の名か巣箱の側面に
- 19 黒膨れあがり漂ふ蜂の縞
- 20 麗らかや零多きジンバブエドル
- 21 岩燕雛を一瞥して発てり
- 22 ラジコンの削ぎし若芝氷川丸
- 23 雑巾で黒板を拭く目借時
- 24 あたたかや股の間に子が眠り
- 25 燕の子巢に顎つけて待ちゐたる
- 26 犬と見る祖母よりの文夏蜜柑
- 27 稜線を撫づる蚊柱賀茂祭
- 28 懸垂の裸足が交差して上がる
- 29 頬ずりで凹んだやうな夏の月
- 30 万の目高と中腰で横歩き
- 31 峯雲やヒッチハイクの指の上
- 32 母戻る入道雲を引き連れて
- 33 洗つても拭つてももう鰻の手
- 34 夜は昼を押しつつありぬ水羊羹
- 35 墓尻に膨らむ長財布
- 36 青鷺が馬穴の魚をぱつと呑む
- 37 郭公や空のプールの底洗ふ
- 38 手刀を切つて茅の輪をくぐりけり
- 39 鼻膨らませ牛蛙聴きゐたる
- 40 鶴の如立ちて蹠搔く大暑
- 41 青葡萄目ひらけば山暮れさうに
- 42 鉤も真つ黒三伏の中華鍋
- 43 遊船や傘も手帳も膝の上
- 44 百の鷺発てり中国自動車道
- 45 蟻登るクールダウンの膺を
- 46 黝き軍鶏の胸立つ南風
- 47 黄昏の蟹が一匹つつ岩へ
- 48 昏睡は泉の如しジギタリス
- 49 罔鮎替ふる裏腿まで浸し
- 50 骨模型の気をつけに秋はじまりぬ

- 51 残照の西瓜畑に母の頬
52 間隔が等し去年の蛸と
53 改札を出でて踊の手となれり
54 左大文字も入れて撮りにけり
55 瓢箪が診察券の色となる
56 草雲雀髪切つて髪掃く仕事
57 職捨つる九月の海が股の下
58 糸のころやごうんどうんと洗濯機
59 猫じやらし揺れ腰骨に手の記憶
60 秋天へ吠ゆ綱引の最後尾
61 曼珠沙華阿修羅毘沙門睨み合ふ
62 洗ひたる障子を檻と思ひけり
63 山粧ふ一つの窓に顔七つ
64 たくさんの手を山霧に翳しゐる
65 水平に運べぬ枢秋夕焼
66 破蓮の奥の日曜学校へ
67 触診はけふ満月と言ひてより
68 通草の実通学路てふ通勤路
69 建材の上に巻尺破芭蕉
70 稻雀の残響駅に入りても
71 味噌汁を吸へばジャズ鳴り出す夜長
72 間取図をスワイプいわし雲流れ
73 原付の右折待機や秋の虹
74 干柿を配りし袋まだ膨れ
75 踏切のなき冬枯の湖西線
76 綿虫を見てゐて顎が水平に
77 枯草や化石に雨の匂ひたる
78 ストープに一人ずつ口開きけり
79 ほそぼそと川を吐きたる冬の雲
80 譜面台の如く現れ鯨の尾
81 激流は喉奥にあり蒼鷹
82 白菜や受験子二人家に蔵す
83 賀状書く番地の途中からは見て
84 冬銀河隣のテントからココア
85 晦日蕎麦持つて下宿に戻りけり
86 伊勢海老の髭重箱に沿ひ曲がる
87 鶯替の鶯は鳥居の色の顔
88 福笹を受け取つて火の匂ひかな
89 車輦間移動吹雪と並行に
90 歯列矯正中の少年雪の宿
91 大津絵の鬼大雪を笑ひをる
92 股広がらず竹馬を降りられず
93 真向かひの家と布団を叩き合ふ
94 保健室受験氷柱に囲まれて
95 ずわい蟹二匹や鍋に睨み合ふ
96 一刷毛の黄の薄れゆく氷かな
97 母を呼ぶ絶叫スキーリフトより
98 白葱をもて両肩の雪払ふ
99 寒稽古門前に雪蹴り上げて
100 大寒の達磨の眉の寄り合へる

- 1 春の闇握手求める手がずらり
- 2 蝶に問う口内炎の市場価値
- 3 野に春をネット右翼に引き際を口
- 4 しゃぼん玉割れてこの世はみな無職
- 5 古傷へ情けない春ばかり来る
- 6 春の海テトラポッドのクーデター
- 7 万引きの再び流行る日永かな
- 8 沈丁花血中濃度乱高下
- 9 打ち合わせもリハーサルもなく春一番
- 10 スポンサーの意向を汲んで鳥帰る
- 11 春暁や鮮やかすぎた質流れ
- 12 春の野にのっぺらぼうとにらめっこ
- 13 花曇ホームシックのブーメラン
- 14 最初から債務超過の桜かな
- 15 花散るや花びらごとにパラシュート
- 16 山笑う笑えなくなる間際まで
- 17 結果論で言えば日本は春だった
- 18 蛇が来る整合性を図るため
- 19 夏痩せて悲しいほどのトートロジー
- 20 打水に追われ亡命してしまう
- 21 手刀を切って横切る夏野かな
- 22 南風に海の匂い、いや膿の匂い
- 23 知りません入道雲の原価など
- 24 コンプライアンス重視のバーベキュー
- 25 さっき脇に置いた話題に蠅たかる
- 26 スナックに出入り禁止の蛍かな
- 27 絶望に合う焼酎はどれですか
- 28 通り魔の刺すたび思い出す金魚
- 29 金魚鉢一生分をプレゼント
- 30 夜店にて三単現のsを買う
- 31 路地裏に中古の虹が積み上がる
- 32 紫陽花を麻酔がわりに手術室
- 33 これは俳句ではないたぶん烏賊でもない
- 34 噴水は自傷行為に憧れる
- 35 噴水を甘やかすからこうなった
- 36 噴水は地域ぐるみの悪ふざけ
- 37 西日浴び硫酸浴びずシャワー浴び
- 38 藪医者 of 眼鏡を割って大西日
- 39 夕立よ野生のパンを殲滅せよ
- 40 炎昼やマナー講師は木に登り
- 41 裸なのか人間の皮を着ているのか
- 42 向日葵は頸動脈を通れない
- 43 痴話喧嘩の物真似をする油蟬
- 44 遊ぼうよ執行猶予中の蚊よ
- 45 空蟬に闇を詰め込むアルバイト
- 46 花火から自己実現のお裾分け
- 47 注射器や秋まで続く夏祭
- 48 元本は減らず残暑は和らгаず
- 49 桐一葉ビットコインを道連れに
- 50 痛風の鬼に囲まれ盆踊

51 あからさまに秋風を待つ悪魔かな
52 袈裟斬りにされて秋思の断面図
53 背負い投げしてくれ月が見たいから
54 半分こしましょと母が月を割る
55 不審者を不審者たらしめる月光
56 仕方なく満月であることにする
57 名月や正気の皆さんご苦労さん
58 官僚が独断で焼くズッキーニ
59 街宣車で迎えに来てよ秋の暮
60 霧の夜に三進法の数え唄
61 流星や腹筋では受け止めきれず
62 柿添えてチンパンジーの置手紙
63 秋雨やトイレしかない遊園地
64 蕎麦を打つ七つの罪に問われつつ
65 白骨化すべきだろうか暮の秋
66 木枯に対抗すべく抵当権
67 落武者の口臭残る枯野かな
68 爆弾を仕掛けるまでもなく枯野
69 肛門から口へ小粋な空っ風
70 冬庭に立派な虚無が生えている
71 北風に削られてゆく法人格
72 落雷を茶番と思う大地かな
73 加湿器や無邪気にデマを噴き上げて
74 おでんだけ恩赦を受ける国にするな
75 熱燗やほとんど祈るようにして

76 落葉から国家機密が漏れている
77 ことごとく体温計に反抗期
78 尿意対熱意(尿意のコールド勝ち)
79 選挙権のお湯割り、選挙権濃いめで
80 夜空から六角形の請求書
81 バイアグラ摂理通りに雪は降り
82 裸木に埋め込む第三者委員会
83 自分から自分にうつる風邪もある
84 復讐に燃えて崩れるスキー場
85 手袋が落ちている手も落ちている
86 空咳や詠嘆してる場合かよ
87 クリスマスにはセロトニンをください
88 行く年や安全ピンの正念場
89 ウォシュレット止まらないまま去年今年
90 門松や点P上の愁嘆場
91 尿道の奥に淑気の控室
92 福笑気を抜けばすぐ目が増える
93 最初にして最後の無頼派鏡餅
94 新年の挨拶がてら差し押さえ
95 だからって独楽を食うことないでしょう
96 交渉の窓口として雪だるま
97 悴んだトランポリンに添い寝する
98 節分の主役にいつも脱走兵
99 顛末を冬の蜂から聞かされる
100 シーソーに求刑通り雪時雨

- 1 サイドミラー畳めば黙や去年今年
- 2 福袋持たされ下着売場の前
- 3 若水をぐびぐひ午後の出走馬
- 4 水切りは祈りの礫福寿草
- 5 教え子の賀状に犬のような虎
- 6 カフェテラスの春ストーブに近い席
- 7 梅一輪挿して親族控え室
- 8 シンクに湯捨てて春夜の警備室
- 9 春浅し焦げもこよなきもんじゃかな
- 10 桃の日の茶碗蒸しとは湯気の底
- 11 来客のたびに紙雛ほの吹かる
- 12 雛の間を経路に庭へ運ぶ馳走
- 13 拳より小さき巣箱の出入口
- 14 替え歌にした卒業歌になみだ
- 15 持たされた磯巾着の捨て処
- 16 夕燕ポストに請求書あまた
- 17 蝌蚪の紐は水の臍の緒揺らめいて
- 18 蕨餅御堂をひどく歩かされ
- 19 サイネリアテレビ画面の端に手話
- 20 遠足の子らに山羊の子後ずさり
- 21 鯨幕畳むや落花巻き込みつ
- 22 束ねたるかに晩春の鯉の口
- 23 まだ口に春苺ある昼休み
- 24 干からびぬ場所まで蛙手の中に
- 25 三鬼忌の熱きもの食う貌無様
- 26 場所取りの帽子は初夏の風にもう
- 27 でこぴんで払うリュックのてんとむし
- 28 花かんむり持つて日傘の母のもと
- 29 置き配のキャベツ鴉に無惨なり
- 30 作業先づ長靴のげじ追い出さん
- 31 紫陽花を掠めて小型バス左折
- 32 船体に水鳥の巣の壊れゆく
- 33 レシートにうさぎの単価梅雨寒し
- 34 噴水に駐めてケバブのキッチンカー
- 35 散水車二台すれ違いざま虹
- 36 水鉄砲握りしめ子の眠る居間
- 37 リムジンの窓にサングラスのチワワ
- 38 びしょ濡れのまま海の家上がるなよ
- 39 ハンモックより子の落ちる一部始終
- 40 海鞘踏めば噴き出る鶺鴒色のなにか
- 41 鰻飯平らげて寄席あと三本
- 42 たまに窓開けて風鈴起こしたる
- 43 バナナ剥く好きだから仏滅だから
- 44 バナナ胃へ焚べて面接二十社目
- 45 灼くる自転車百台撤去して日銭
- 46 教会の木々にも括る祭の灯
- 47 応援席全てに行き渡るかちわり
- 48 猿今日も旱の村へ繰り出しぬ
- 49 着崩れの浴衣に蒸れて湯後の肌
- 50 甲板へ出る夏シャツはくじら柄

- 51 船出まで島の夕焼を見届けよ
- 52 立秋の半旗はためくこと止めず
- 53 処暑の夜の戸口に今日の浜の砂
- 54 待ちぼうけとはひぐらしに飽きること
- 55 タバコだけ買いに野分の十五分
- 56 竜田姫おるかにピザ窯の業火
- 57 遺失物提げて秋風警察署
- 58 撤収のホースさやかに巻く手つき
- 59 熱帯びたラジオの匂い風祭
- 60 ショッピングモール手ぶらで出て秋思
- 61 月清かハノイの鴨の血のスープ
- 62 揺り椅子の手すりの丸み菊日和
- 63 終演のしじまB-2の席に菊
- 64 しなやかに窪む箸置き黄落期
- 65 車中の灯頼りに夜食とる路肩
- 66 目覚めればみな梨食うている機内
- 67 退勤の身に沁む受診メール0
- 68 唐辛子軽し他人の悩みほど
- 69 用務員さんにも赤い羽根あげる
- 70 法定は花野少年裁判長
- 71 百の目のごとオリーブの実は瓶に
- 72 飼育小屋まで朝霧をさ迷えり
- 73 馬魂碑へ手向ける林檎はや黒き
- 74 実むらさき会話途切れてより口笛
- 75 配給の行列最後尾は流星
- 76 冬浅しパンは聖書に似た厚み
- 77 小舟より手は冬の水触れたげに
- 78 冬青空ぬくきコアラを渡されて
- 79 北風ごと蹴飛ばす缶にまだ中身
- 80 現場主任よそこに焚火の最前列
- 81 ひと蹴りで壊す冬日のもぐら塚
- 82 空きコマのベンチ悴むしかないか
- 83 酒屋までなら半纏の許容圏
- 84 もう飲むの辞めた薬がある炬燵
- 85 炬燵猫どかせば牌の出てきたる
- 86 寒椿拾えばバスのクラクション
- 87 口癖が「でも」の部下にもある賞与
- 88 地下深きカレーハウスの冬灯へと
- 89 遥かまで暗き時雨の滑走路
- 90 全車両へ囃のまじるアナウンス
- 91 暴論は帰路のマスクへ吐き出さん
- 92 室咲や頼んでもないブックカバー
- 93 冬鷗握れぬほどに熱き缶
- 94 ニトン車へ毛蟹雪ごと積み込みぬ
- 95 クリスマスのカップル越しに見る水槽
- 96 花枇杷や切手の鶴の眼恐ろし
- 97 凍道の鴉の死骸めく軍手
- 98 肩の雪落とし酒場の灯へ戻る
- 99 荒星の砂漠を小さき郵便機
- 100 ふたりぶんのてきとう玉子酒ふふふ

- 1 易者のごと箸洗ふ父地蔵盆
- 2 ダイヤル錠合はすごとくに飛蝗向く
- 3 なきがらの頬なでし手に林檎喰む
- 4 冥錢を洗ひ上ぐるや秋の宵
- 5 秋汀に確かな尻の跡ふたつ
- 6 野ざらしの人参の根の薄みどり
- 7 園児バスゆきて日なたの冬すみれ
- 8 せつせつと下げし頭の木の葉かな
- 9 嫁がせる心に似たり七五三
- 10 納豆は白く結婚十年目
- 11 親指もあたたかである指ずまふ
- 12 泣きながら音読の子や春隣
- 13 ひび割れた木の実や守られてゐた
- 14 御守りのかたちおのおの受験生
- 15 無意識の嘘を泣く子やうらけし
- 16 蒲公英や退位の皇に無精髭
- 17 祈るほど頬の触れ合ふ日永かな
- 18 夏めくや考えぬ葦繁栄す
- 19 ヴァイオリン弾くごと乳齒磨き虹
- 20 消すやうにつづる言葉よ水馬よ
- 21 薫風や虹彩認証に微笑む
- 22 福引の刹那まじまじ君の鼻
- 23 ヴィーナスの尻尾が落ちて蛇となる
- 24 両手ともバナナジュースか夏の刑事
- 25 いきいきと小さきマスクを夜濯す
- 26 雨乞ひの邪馬台国ぞ開票日
- 27 あだ名なき社員のままや八月来
- 28 海風よトマトーふたつ甘うせよ
- 29 雷電為右衛門ずんずん野分
- 30 うららかやポニーテールの掃くうなじ
- 31 しやぼん玉吹きてあめ玉落ちにけり
- 32 風船を出張の夜の妻とする
- 33 棺桶に手向けまはらぬ風車
- 34 置き去りのめがね試すや山笑ふ
- 35 どろんこの手の五百円苗木市
- 36 大の字で感ずる花よ呼吸音
- 37 駄菓子屋の居間に集ふや卒業子
- 38 流星をなぞるや廃墟ソロキャンプ
- 39 父に似た蜘蛛柔らかな一周忌
- 40 名優の死や秋霖の時計草
- 41 雨宿りして事切れし蜻蛉かな
- 42 狼の祭りや子役オーディション
- 43 どんぐりはただですひろい放題です
- 44 九年母をもぎて衣裳部引退す
- 45 メガホンで褒めらるる人冬の星
- 46 エレベーターの終点落葉落葉
- 47 ドアホンへあやまる子らの素足かな
- 48 そこいらに旺盛な死の八月来
- 49 花は葉に四人家族は二度寝して
- 50 五六回抱きしめらるるボーナス日

51 兒もげしまま飛んでゐる冬の蜂

52 つくづくし少年の日のごと傾く

53 秋うらら垂木の端の真白さよ

54 こもれびに龍のまなざし秋澄めり

55 春落葉並べて書斎作りけり

56 月光を受くる鍵束主役待つ

57 はじまりのごと朝顔の実の乾き

58 転がらぬ団栗ばかり集まれり

59 和洋中ロケ弁そろへ天高し

60 でかい犬みたいな瞳秋日和

61 まんまるな猫の寝返り夜食はむ

62 垂れ下がるランドセル追ひ青き踏む

63 佐保姫と並び空港ピアノかな

64 春雷を反り返りたる斬られ役

65 初釣の鱒原人の目で炙る

66 若駒の背を九歳の黒き髪

67 蜜蜂や線形代数に微風

68 春昼や純喫茶めく子ども部屋

69 カーテンの巻かるるからだ風薫る

70 悪がきのごろごろ光る立夏かな

71 かちこちの蚯蚓を剥がす烏かな

72 蛇噛んで犬に戻りし老犬よ

73 寒星や天職にある笑ひごゑ

74 囁きを集めて歌留多作りけり

75 下の子と待合わせする毛布かな

76 畑焼のあるべき場所にある野壺

77 腕時計残す裸身よ花曇

78 若芝へ立ち小便の少女らよ

79 傾きて固まつてゐる春コート

80 前かごに傾きしピザ夏燕

81 父の日の信号待ちの多さかな

82 開票や世界に取り残さるる虹

83 梅漬けてキューポラの街守りけり

84 赤ちゃんのころん晩夏の福引所

85 「一本」の声にほどくる指よ汗よ

86 朝顔の種の出てくるトウシューズ

87 金銀の折り紙溜めて卒園す

88 マスキングテープたくさん切る四月

89 日直の発声稽古春の宵

90 賢しげに並ぶ唇わらびもち

91 円陣を組む母の日の縫ひぐるみ

92 新緑や白米のみの手弁当

93 大賞の妻を見上ぐる小春かな

94 水泳帽ブロッコリーにかぶせけり

95 直角の三角座り運動会

96 祖父母生き父母生くる青田道

97 停電の手すりを撫でて冬ぬくし

98 撮休やひとりの部屋で揉む蜜柑

99 数へ日や大地に根付く植木鉢

100 文旦よみるみる人となる吾子よ

- 1 終電はいつもぶわぶわしたナスビ
- 2 みつ豆食って水玉になる体
- 3 酉の市どこにでもあるコンセント
- 4 菜箸を剣にして立つ大晦日
- 5 いつまでも肩こりいつまでも雪だ
- 6 銀色の大きな耳飾り追儼
- 7 耳鳴りの結果蜜柑を上手く剥く
- 8 靴下に穴我々の家に春
- 9 ハグしてね春泥つけてねって言う
- 10 春の昼たっぷり新生児の匂い
- 11 春の夜機械はまっすぐ紙を吐く
- 12 薄力粉ふるう春の鳥が来る
- 13 大阪弁下手やなあ春の雨やなあ
- 14 かさぶたを剥がす四月の跡残る
- 15 花冷えのやっと外せるコルセット
- 16 この商品にはエビカニ春を含みます
- 17 メーデーメーデーシートが斜めになってます
- 18 眼鏡くらい外せよ夏の月見ろよ
- 19 白靴を脱いだ後のことは忘れた
- 20 あっ虹、虹、 指にいくつも絆創膏
- 21 八月の水を平らに整える
- 22 嘘つきの嘘を蛭にして返す
- 23 朝曇椅子ばかりある小学校
- 24 揚げたカツ揚げてないカツ秋うらら
- 25 母の母の母の代から栗ご飯
- 26 早生蜜柑なるべく綺麗に顔面に
- 27 丁寧に答えるストーブから熱風
- 28 クリスマスみんな少女漫画の目
- 29 冬の月我々なんでも煮込む族
- 30 本当のこと言ってみる火事の跡
- 31 大いなる嘘朝顔の種摘んで
- 32 春一番二、三、四番めの男
- 33 風光る指輪をつけるため外す
- 34 遠くから来た犬猫一春の風
- 35 鉛筆を何度も持ち直して遅日
- 36 袖裾指鼻とんがって入学式
- 37 昭和の日いつか別れる人の横
- 38 卯の花腐しコマンドZがあったなら
- 39 窓からの光真夏の来る角度
- 40 髪よりも服よりも声麦茶飲む
- 41 夏というレフ板眩しすぎないか
- 42 湖の遠い人から夏休み
- 43 乙女らは滝から滝に移動中
- 44 まっすぐな背筋まっすぐな汗じみ
- 45 隣人はいつもパツパツの夏シャツ
- 46 もう今日から秋ですつぺつぺした空です
- 47 同じ背の本みっしりと虫時雨
- 48 文化の日迷ったことを褒められる
- 49 窓から窓見えて隣は柿を食う
- 50 君のすきなひとの話を聞く照葉

- 51 十月の海海からの白昼夢
- 52 冬めいて音は耳から分離する
- 53 南天がたわわ抜糸の痕残る
- 54 狐火が石の代わりになる指輪
- 55 鏡には初夏の人のみ映りおり
- 56 十本の指それぞれに蜂を飼う
- 57 鶏だしの奇妙に澄んで春の昼
- 58 桜散る重力戻ってくる季節
- 59 みどりの日やっぱりチョコレートは明治
- 60 猫の脈測りて夏の匂いして
- 61 映写機が静かに沈む薄原
- 62 芍薬がひかりを食っている現場
- 63 牛乳の膜柔らかく五月雨
- 64 口紅の落ちて昼寝の静けさよ
- 65 理想的空の青さよ砂糖水
- 66 2Bの鉛筆入道雲に影
- 67 朝顔繁殖角砂糖の城
- 68 秋の湯に浸かりて歪んでいる体
- 69 血流のはっきりわかる傷、春光
- 70 温度二度下げて日永の給湯器
- 71 エコバッグ重し新じゃが新キャベツ
- 72 ふくらはぎほぐす春塵にも光
- 73 せっかちも菜花を湯がくとき静か
- 74 ムダ毛という毛はなく桜開花予報
- 75 ロングラン上映中の四月馬鹿
- 76 スーパーのカートに重き冬を載せ
- 77 春愁猫のいる窓いない窓
- 78 どこにでもいける湯船の金魚みる
- 79 手を振ってくれ野薊を摘んだ手で
- 80 薔薇の実を棘ある枝ごとくれてやる
- 81 秋の暮列車に長き光の尾
- 82 三キロの遠距離恋愛レモン切る
- 83 鶏頭と並んだ頭を撫でてやる
- 84 処世術知れば初秋の諸症状
- 85 スイカ割りされない海ばかりある
- 86 立葵かつて実家のあった場所
- 87 不機嫌な空に弧を描く夏燕
- 88 ヤモリじっと月は地球の影に入る
- 89 子犬連れ歩くように日傘差す
- 90 できるだけ綺麗な言葉お中元
- 91 らしさってなに？焼き茄子の皮を剥け
- 92 ヒコーキと発音する子梅雨明ける
- 93 金継ぎの金の光や今朝の夏
- 94 銭湯の窓大きくて清和かな
- 95 野良猫に春の行方を聞けどにゃあ
- 96 花過ぎて雨の匂いを嗅ぎに出る
- 97 街は無人芙蓉空を向いて咲く
- 98 眠るべき日もあり養花天養花天
- 99 言葉みな鈴ぶら下げて十二月
- 100 柚子絞る指の形の台所

- 1 雲と雲ぶつかつてゐる犬ふぐり
- 2 そろはざる鷗の声も二月かな
- 3 鶯笛吹けば優しき息となり
- 4 この旅は睡つてばかり雪解川
- 5 対岸の友は土筆を摘みにけり
- 6 生者には足跡ありて花薺
- 7 蝶の腹つまんで此れは誰の夢
- 8 徳利のふちの欠けたる蒸鯉
- 9 手品師の布の内なる春夜かな
- 10 うららかに指は運指を忘れざる
- 11 雲はこぶ風の速さやコッペパン
- 12 踏むほどに明るくなりて雲雀野は
- 13 貝寄風に懐かしき声まじりたる
- 14 はたてなく雲のながるる寝釈迦かな
- 15 壺焼や真実いつも焦げ臭く
- 16 菜の花の思はぬ茎の太さかな
- 17 春の夢より鈴ひとつ零れたる
- 18 五線譜を遠くはみ出し春の雷
- 19 花一片水面をうすく凹ませり
- 20 坐るたび木椅子かたむく鳥曇
- 21 濁りより亀の浮きくる暮春かな
- 22 野遊びのすゑの睡りの花のいろ
- 23 葉から葉へ尺蠖渡り損ねけり
- 24 手に乗せて埴輪の馬や緑の夜
- 25 歌はれぬ歌忘れられ花茨
- 26 ぼうふらの影もぼうふらしてをりぬ
- 27 夜が水をゆきわたらずに白牡丹
- 28 皮むけばバナナしりりと音すなり
- 29 生くる者みな騒がしく析の花
- 30 時といふ不思議を雨のボルヘス忌
- 31 紫陽花も詩想も滲んだる夜か
- 32 大鯰のせて小舟や夢ぐもり
- 33 黴の世と思へば生の耐へやすし
- 34 七月の窓といふ窓開け放ち
- 35 流れゆく雲に遅速や今年竹
- 36 少年の瞳は乾き夏つばめ
- 37 恐竜の骨見て冷し中華かな
- 38 梁の上の闇濃かりけり冷し酒
- 39 星間に闇たつぷりよ墓
- 40 ふと触れて泉さびしき声を出す
- 41 眠る子に泉の遠くなりゆけり
- 42 風鈴や昨日とちがふこと云はれ
- 43 山ほどの胡瓜もらへる会社かな
- 44 蚊を打つて東京のこと忘れたり
- 45 茄子を焼く軒打つ雨に耳馴れて
- 46 百の蟬耳底に百のこゑとなり
- 47 肅々と封を閉ぢたる夕立かな
- 48 人の世に階段あまた晩夏光
- 49 活版の文字の凹みや夜の秋
- 50 ペンギンに頼ぶたれたき残暑かな

- 51 山よりも大きな雲や休暇果つ
52 八月を誰とつながる糸電話
53 忽ちに雲の翳りや葛の花
54 覗きたる如雨露の底に草雲雀
55 波の上に波のくづるる秋扇
56 生身魂そろりと雲へまぎれたる
57 大鈴の割れ目へ入るや秋の蜂
58 瓢箪を浮かべて水の夕まぐれ
59 花野にて失せたる鍵のいくつか
60 雲中にひかり籠れり稲の花
61 冬瓜を抱へて人のうつとりす
62 ときどきは光り忘れて秋の波
63 十六夜の底より垂れ蜘蛛𧸂
64 日に傷む木椅子へ小鳥来たるらし
65 声やがて漣となる九月かな
66 子規の忌や足裏を蚊に刺されたる
67 日に水のふくらんでゐる秋彼岸
68 牧神の笛の音高き葡萄かな
69 菊運びをり階段を軋ませて
70 十月は額に犀の角が欲し
71 まづ声を忘れてしまふ草の花
72 考ふるうちに眠りて烏瓜
73 るふらのぎんのおんぷのしぐれをり
74 行き暮れて蓮根抱へ唄ひけり
75 ぶろぶろと機械や落葉吹き飛ばす
76 凧に影の遅れてついてくる
77 なかぞらに鳥遊ばする初氷
78 一睡のせつなき菊を焚きにけり
79 怠けよと冬の空より鳥の羽
80 ポインセチア午後の光を愛しけり
81 蘆枯れて夢のやうなる雲ひとつ
82 天守より海よく見えてゐる寒さ
83 どどどとわが初夢を駆けて犀
84 寛やかに寛やかに初日の出かな
85 雑煮餅より人参を剥がしをり
86 去年食ひし鯉思ひ出す六日かな
87 エンジンを巡る油も寒の入
88 嘴あけて舌みじかしよ寒鴉
89 人影に枯木の影のかさばらず
90 着ぶくれて渚あるきの旅となり
91 冬空の骨の匂ひのしてきたる
92 もう一度犬の名を呼ぶ枯野かな
93 寒林を抜けて軀の薄くなる
94 さしのべて枯枝へ手は鳥のかたち
95 雪の踏み固められしに枯松葉
96 外套の裏はサテンや土星の環
97 雲呑の破けて春の遠からじ
98 夢は見しままを語れず寒椿
99 くきやかに冬満月のある机
100 晩年に名作多し冬すみれ

- 1 夜驚症 ほら立体の犬駆け抜ける
- 2 いつもうすみどりいろの葉から目覚めてる
- 3 チューリップみんなが買っているのですよ
- 4 月見月 羊腸のコンテナ積み上がる
- 5 暴言と罵詈の間のティッシュかな
- 6 思いました私の全てが小指だと
- 7 ベンツから出る右腕、を見る立場、サイレン
- 8 大破して閉じ込められたくなりふたり
- 9 狂ったら心があることになっちゃうよね
- 10 アルペジオもない恥ずかしい手の甲は雪受けとめ
- 11 心こだます肉体までの溪谷を
- 12 ラッパ頭の犬電球へと移り変わり
- 13 九官鳥 皺は夜に薄まっていく
- 14 私って頑張ってるわヒラメ裏返す
- 15 栄螺(さざえ)らしく包丁を見ていればいいのです
- 16 人なだれ込みわたし薄まりぬ
- 17 マカロンよ持論などある人はいない
- 18 眼球を押せば明るいお部屋かな
- 19 化石にしてあげるそしてやさしくしてあげる
- 20 落雷あなたの脚は湖になり
- 21 鉄は海に集う羊ら刈りあがる間に
- 22 工事音に扮して牝牛と雄牛は貴く
- 23 凍りゆく豚ハツの芯はへつらいつつ
- 24 春ですが前ばかり見てると轢かれますよ
- 25 三辺が120cmの恨み引き取られる
- 26 ラズベリーパイ寄り目で笑わせておくれ
- 27 サンプルAに思惑立ち込める客間
- 28 またあした祖母の歯茎で呪うから
- 29 川崎で手首がシマウマになったのかい
- 30 鳥は鳥の体積の内を飛び続け
- 31 こんにちは、或いは、ふざけるな、と吠え
- 32 背表紙の船発ち私を彼女にしなさいよ
- 33 遊具去り人が一本ありました
- 34 寂しいか瞼の裏に犬でも描け
- 35 水を飲もう衛星は母振り落とす
- 36 托卵やどっちがミルクこぼしたのかな
- 37 分裂をしたい鏡とか買って
- 38 かけ流し 女は帰り道を知っている
- 39 父の話は口が裂けたら言いますね
- 40 箱詰めの犬の目黒し柿を干す
- 41 糊はがれ本が開き出すあなた
- 42 信号無視みみずは土で腫れている
- 43 タイヤ痕 無思想の昼ごはんかな
- 44 白状することなんてない洗濯機回り出す
- 45 黄身を打つ鉄杭ほがらかな土曜
- 46 ケーキお食べ弱った男は懐紙とする
- 47 葛饅頭ガムテープは瞼を曳き
- 48 魚って舌べらありましたっけ冬銀河
- 49 横顔は留まりその他蒸発す
- 50 循環論法の上で月蝕とかをしてる

- 51 カーテンめくり母のこと剥がれていく
- 52 表札割れハイオクがいい香りだった
- 53 これが最後なのかもアイロン冷え
- 54 救急車が急いでいるんだね衣擦れ
- 55 コンクリで今日を希釈する友達
- 56 耳少しづつ歯車となる彼誰(かわたれ)
- 57 約20kgの人肉経てテレビ見てる
- 58 名付けるとはおこがましいこと鳩降り
- 59 木漏れ日を浴びれて廃車は幸せだ
- 60 時間は乳を吸いガジュマルは何を垂らす
- 61 あなたの背のほこりを払う私は今日も生きていい
- 62 米粒に手足が生える女正月
- 63 稚児振り向きあらゆる引用をする唇
- 64 粘土から男こしらえる冬仕度
- 65 欲しがって欲しいと思う湯踊りだす
- 66 地滑りを見に来る牛だ列車は鏡持たず
- 67 銀竜草はやく枕を押しつけて
- 68 遠くばかり見ている男だ羽抜鶏
- 69 多年生の木馬回り祝日を強いるか
- 70 鉄馬だいい齢をして脱ぎ
- 71 鯛浮かぶいますぐ屋上まで来いよ
- 72 二重窓の間で麒麟ゆらいでいる
- 73 骨盤が弾け降りかかる腐葉土へと
- 74 保険売りよ初耳の金型がならび
- 75 隠れましよう街中に眉うねる時は
- 76 地下鉄はあなた吸い込んでいくどうして
- 77 道は凧ぐ小雨依り憑く警官立ち
- 78 凍土より自分語りの符湧きあがる
- 79 表皮母斑のかたちの雨もようたくちすい
- 80 螺旋骨折そういうところが好きかも
- 81 雲間晴れて少しつながってくる回路
- 82 太陽は肝臓をやられてそうフォックスファーが好き
- 83 皮剥ぎや遠くに芋の唄が聞こえ
- 84 レーズンパン人柱になるなんて遺憾
- 85 生まれ来る子のうちの狒々よ欠伸をし
- 86 大間違いの雲浮き婦人警官記念日
- 87 冷蔵庫の裏に故人の記憶二匹
- 88 鹿喰いを赦され雌豹分解され
- 89 寒犬やあくどい蛇はやつだと言え
- 90 光を食み霜降りつもる牛の肩に
- 91 雪兎研ぎ切る手ばかりが残り
- 92 啓蟄や座ったお尻に穴がある
- 93 昼間って暗いもの耳と耳すれ違う
- 94 地価上がる意気地のない抱っこでも続けて
- 95 湯が張られくちびるが心から剥がれ
- 96 海老は海老を踏み電話掛かって来た気がしてる
- 97 話題の無い偶蹄類は海を眺め
- 98 ダンスでもしていたらいい蟻ら満ちる
- 99 櫛振る鹿悉く胴体無く
- 100 鼻歌歌え列車は骨を欲しがると

- 1 踏切の一瞬に断つ冬の虹
- 2 鴨の陣散らし逆光さざめける
- 3 雪飛ばす山を彼方に鳩の首
- 4 ハイビーム枯木つぎつぎ去り行けり
- 5 雪となる夜景の奥の雪の山
- 6 わが深きところへ飛雪息晒す
- 7 雪解風陸羽東線来る気配
- 8 一本は海に吼えたる黄水仙
- 9 耕しや蟬幼虫の死を抛り
- 10 鳥帰る窓辺に小さき魔法瓶
- 11 騎馬像の刳りたる眼風光る
- 12 花曇りきれいに割れぬチョコレート
- 13 電灯のひそかな異音さくらの夜
- 14 津波禍の崖大いなる薄暑光
- 15 砂溜る破船の中や南吹く
- 16 蝸牛のぼる獣型遊具の目
- 17 白ばらへ雨の垂直濁りけり
- 18 夜の靄を動かしてゐる百合の群
- 19 火蛾好む避妊具自動販売機
- 20 果実酒の翳のただよふ夜の秋
- 21 八月や禁を増やして回覧板
- 22 頭痛激し明朝体に夏風邪に
- 23 日当たりを打ち捨ててゆく秋の聲
- 24 研ぎ痩せの手鎌に水の澄みにけり
- 25 潰えたる草の吐き出すすいつちよん
- 26 日の射せば表裏が生まれ花芒
- 27 鉄棒の日晒しの青秋高し
- 28 火の色を沈めてゆけり曼珠沙華
- 29 曼珠沙華吹き残されて茎二本
- 30 鉄塔の影へ従きたる稲ぼつち
- 31 背中より秋思のゆるぶ野湯かな
- 32 星月夜朴の木の暗大きかり
- 33 雪せまる麓や地熱発電所
- 34 拭ひたる車窓の山野みぞれけり
- 35 少年の葱を一本さすリュック
- 36 日のかつと地に窓につく迄は雪
- 37 茹で上がるうどんの真白日短
- 38 掌にざらと湯飲の罅や春を待つ
- 39 湯治場の瓦斯十円のあたたかし
- 40 川音は地を這ひのぼる花薊
- 41 はめごろし窓へかたまる春の蠅
- 42 人佇つと忽とあかるし辛夷散る
- 43 みぞおちの締まつてゆけり春の雲
- 44 落ちてきし赤子雀と空透明
- 45 都忘れ跼めば胸を風通る
- 46 建売の骨組み上がり月おぼろ
- 47 水底を泥膨れくる植田風
- 48 落の葉に水の濃淡走りたり
- 49 初蟬や真つ赤に剥かれ松の肌
- 50 土を乾すビニルの端を蜥蜴の尾

51 梅雨夕焼黄色のシャツをさみしうす
52 薔薇しぼむ薄明りして曇の水
53 掛時計ながながと鳴る夜涼かな
54 夜濯に道着の藍の匂ひけり
55 二階より更地の見えて盆の入
56 夕暮のひそやかに来る稲の花
57 茄子の馬夜のカーテンふつと揺れ
58 にんじんの皮のはらりと敗戦日
59 出奔と家譜に短くばつたんこ
60 田の風は墓域へ通ふ葉月かな
61 紙コップ萎れ残暑を乾しにけり
62 流木の端のみ乾き秋の蝶
63 波の間の消えぬ足跡小鳥来る
64 稽古着にいつか夜寒の来てあたり
65 涸川の夜に白波の棲みつける
66 荒星に流るる星の幾筋か
67 初雪のこぼれくる夜の広さかな
68 カフェオレの皺さつと混ぜ雪くるか
69 靴下の転がつてゐる冬日向
70 息白しネオンに不備の破裂音
71 亡き人の夢にふたたび余寒かな
72 改装のペンキ真つ白木の芽風
73 啓蟄の闇を抱きたる蒙古の碑
74 サイレンの此処には鳴らず紅椿
75 鳥帰る廃船といふ道しるべ

76 島風ぐや落花行き着く貝の殻
77 振花やバスが来ぬなら歩き出す
78 やまかがし雑木の森の日の真白
79 杉大樹夕立の中に息づける
80 梅雨霧に車の鍵のかかる音
81 夜を鎮め鎮め蛍火湧きあがる
82 ほうたるのこぼれ夜に浮く手首かな
83 落人も見しか一縷の大蛍
84 人白くほたるの森へ溶けきれず
85 朝涼やタオルケットを少し引く
86 もう消えし夢の記憶の爽やかに
87 山の雲迅し芒の反射光
88 湧水の汲めば飛び散るうろこ雲
89 滝よりの圧に四肢爆ぜ天高し
90 新幹線無月の山へなだれこむ
91 星降るや山に漲る星の息
92 流星を見取れば首の凝りかな
93 冬木に日木の生涯の閃けり
94 ボールペン幾度か掠れしぐれたる
95 敗蓮の突つ伏す水の白さかな
96 顎の骨がきと鳴りたる霜の朝
97 去年の雪ざつとこぼして神樹あり
98 実南天一枝を挿す喪の戸口
99 寒満月三十秒の通話かな
100 あたたかし貰ひしままの旅行券

- 1 劇薬にして霊薬の夏来る
- 2 桐の花散る水の管・瓦斯の管
- 3 朔太郎忌のあをいろの血をおもへ
- 4 蝸牛うつとりと葉を剥がれけり
- 5 素袷や雨意のはじめの花の白
- 6 靴紐を蟻のぼりくる宿酔
- 7 枳の花散りて薔の陰ひなた
- 8 麦飯や拭ひて卓に水のすぢ
- 9 手のあぶら薔薇にうつしてしまひけり
- 10 夜のプール葎草の葉の落ち浮ける
- 11 紫陽花や消毒液を手に降らし
- 12 雲間より夜の白みたり青葉木菟
- 13 拭く窓のそとがはを蚊ののぼりゐる
- 14 さみどりの何かや眼鏡掛けて瓜
- 15 喪の家の片蔭に荷の置かれけり
- 16 蒿苳に巻く肉ほの熱き南風かな
- 17 離したる手が潮焼の頬を搔く
- 18 ビーチパラソルその下に日傘差し
- 19 突堤に磯蚯蚓の乾ぶ西日かな
- 20 融けて其の水に蚊の浮く花氷
- 21 合飲の花眼鏡光りて眼の見えず
- 22 ビリヤードボールつやや夜秋
- 23 蒲焼の匂ひの秋の団扇かな
- 24 缶詰の蓋反り上がる盆の月
- 25 茎にぎす摺まりゐるや腹付けず
- 26 ほほづきや伝票書くに壁つかひ
- 27 ガスタンクの奥を日落つる野稗かな
- 28 肉剥がす二百十日の鉄板より
- 29 水引の花や犬にも喉仏
- 30 プールに藻はびこり初むる柘榴かな
- 31 さやけしや神籤焚く火に花くべて
- 32 まなうらを洗ふ術なし吾亦紅
- 33 竜胆の奥まで霧のゆきわたる
- 34 傾けし首鳴りにける夜食かな
- 35 溝蕎麦や傘の黒きに灯の透けて
- 36 丸め持つ体育祭のプログラム
- 37 鼻歌にうらごゑ混じる野菊かな
- 38 秋しぐれ全篇を読みあがなはず
- 39 葉間より地へ藟の実の影の粒
- 40 夕鵂や乾きて割るる紙粘土
- 41 角部屋に陽のありあまる林檎かな
- 42 落ち掛かる毬栗に月荒々し
- 43 鵂の贅方位磁針の玻璃くもる
- 44 熟れきりし菱の実に湖遠くあり
- 45 櫓田へ薄の折れてをりにけり
- 46 薄寒のマイクが息をよく拾ふ
- 47 水筒の内なる水面虫時雨
- 48 鶺鴒の松の落葉を踏み歩く
- 49 ひよどりや朴の梢に葉の破れて
- 50 まばたきに眉連れうごく時雨かな

51 咲き満つる山茶花に雪吊の早

52 蜘蛛が蠅喰ふ石路の花の上

53 脚組めば踝の見ゆ藪柑子

54 おほあめを馬走らする冬芽かな

55 切株は蹄のやうに冷えてをり

56 石路の花須臾の轍をにはたづみ

57 葉牡丹の葉の隙の柿落葉かな

58 ジャケットの襟に項の肉の載る

59 熊笹の枯れ其の脈の遅れ枯る

60 一錠と水を朝餉に枯芙蓉

61 水入れて笛なす壘の聖夜かな

62 巻貝にかはらけの気や星冴えて

63 星座ひとつ火事の向うに隠れけり

64 けだものの脂は白し枯木山

65 鱈売るや身と腸をひと策に

66 歳の市積みて酢蛸の濃くれなゐ

67 一枰に百日が過ぎ絵双六

68 人日やひとつながりに髪と髭

69 よく橋の翳るあろゑの蕾かな

70 悴むや宿の鍵より棒垂れて

71 飛ぶ雁の嘴の黄も寒の入

72 腕時計見る手袋と袖の間に

73 寄鍋や煮るまへの菜を鍋の蓋

74 温室の骨組を夜焚火の烟

75 葛枯れて鋼づくりの長煙

76 脈透けて雪ペリカンの喉袋

77 給油口開くや四角く雪の浮く

78 粉雪のとほくより火を焚く匂ひ

79 傘ぶくろ傘に貼り付く余寒かな

80 砂に足埋め料峭の亀眠る

81 金縷梅や日のかたはらを雲の散り

82 岩に角擦りゐる犀も梅の昼

83 涅槃雪薪の小口のあふぎがた

84 白鯉のまなぶた紅し榛の花

85 蟻穴を出づ判子屋の鋸と鑿

86 其の四方に土竜塚あり雪柳

87 さへづりや水へ垂れたる縄梯子

88 笹舟のかそけき水脈を蜂の脚

89 かはうその尾を摺り歩む穀雨かな

90 麗けしおほかた毛なる犬の嵩

91 はなみづきパン屑は刃を引くたびに

92 降りながら雲張り詰むる薊かな

93 望潮うたかたに陽の瞬ける

94 春愁の木篋に砕く海老の殻

95 コンパスを離し春暮の紙に穴

96 春月の光の幅を木の匂ふ

97 花篝串に蛇腹の鶏の皮

98 鯉の尾へ鯉のくちづけ花曇

99 花の雨重ねて椅子の段をなす

100 ふぢつぼの覆へる壺よ春を雲

- 1 雨やみて湧き立つ揚羽変声期
- 2 噴水や記憶の母のふいに黙す
- 3 初夏の教卓につく両掌かな
- 4 牡丹の緋の深々と海荒るる
- 5 髭剃つて襟に付く血やメーデー歌
- 6 ガード下の刹那の無音五月来ぬ
- 7 百合萎れジェイ・ギャツビーを笑へない
- 8 動かぬもの引き摺る猫や青葉闇
- 9 箱庭の軽き女をつまみけり
- 10 夏瘦や月なき湖の櫂の音
- 11 国道のポルノショップや雲の峰
- 12 ゆだち過ぎうつとりと夜の来たりけり
- 13 西日射す電話ボックス海遠し
- 14 新宿の雨ぐしやぐしやのハンカチと
- 15 森閑と炎屋にあり我も街も
- 16 旱天や銃器包める油紙
- 17 曖昧な曜日感覚缶ビール
- 18 テークオーバーゾーン砂巻き上げ灼くる
- 19 香水や鏡に映す自傷痕
- 20 犬のこゑ過ぎゆくプールサイドかな
- 21 天使魚やバーのピアノに凭れ眠る
- 22 生ひ立ちを階段に聞く夕立かな
- 23 海の香を曳きくる蝶や日の盛
- 24 夏霧の父を思へり火を見ては
- 25 音楽をとほく離れて泳ぐなり
- 26 夏蝶の死や裏返り裏返る
- 27 逝く夏や日輪に鳥消失す
- 28 離職者が荷をまとめたる夜の秋
- 29 男あり月に縛られゐたりけり
- 30 日に褪せしバンドスコアに秋の蜘蛛
- 31 史記五十万字が書架に冷ゆるなり
- 32 夕空の緘黙に降る木の実かな
- 33 放蕩や胡桃の髪をなぞりたる
- 34 箴言のごとく空澄む帰燕かな
- 35 真夜中のカンフー映画颱風圏
- 36 天高し家なき人が猫を抱く
- 37 穰田や炎渦なすドラム缶
- 38 暗澹と秋果の照や山月記
- 39 贅のごとしづもる村や真葛原
- 40 鳥渡る九龍城のまぼろしへ
- 41 胸奥に雨の家ある野菊かな
- 42 手繰りたる舟の重さや秋の暮
- 43 髪からだ記憶たましひ霧となる
- 44 冬蝶のゆるされてゐる日差かな
- 45 さみしさに金欲しがる子夕時雨
- 46 雪虫と言ひてしばらく黙りこむ
- 47 影連れ立つ相談室の寒灯に
- 48 人を待つ眼のさまよへる冬の暮
- 49 ピンボール明滅街に雪降りり
- 50 春に母となりたる君よ日記買ふ

- 51 結氷や体育館にピアノ鳴る
52 白鳥の頸からませて啼きあへる
53 塵取に鳥の死軽し山眠る
54 まなうらに立ち尽くす子や冬夕焼
55 暁の夢おそろし兎の眼恐ろし
56 濡れ髪のをんなと火事を見てゐたり
57 繭玉や一間の冷えの足裏より
58 松過の客泣いてゐる仏間かな
59 教会の縁石に座す着ぶくれて
60 コップの水・冬木・夥しき鴉
61 ふてぶてしきハムの塊冬館
62 十字架の影冬芝に歪みをり
63 祈り終へし人のしづけさ寒卵
64 頬杖にイルカショー見る雪催
65 オイスターバーギターケースが一席占む
66 地に置きし鉈あり霜の夜となりぬ
67 梟や絵描きの眠る革ソファー
68 ピエロからドーラン匂ふ寒さかな
69 終電に獣の匂ひ冬の果
70 屑籠の花束匂ふ春の雨
71 聖堂に人吸はれゆくミモザかな
72 対岸の畔焼かれをり愛欲しき
73 馬の脚雨にけぶりぬ落椿
74 石鰯の刻印淡し蝶生まる
75 梅ひらく肉食獣の檻の前
76 しばたたくたびに鳥滅る干潟かな
77 今生の蜜引き椿落ちにけり
78 子をあやしつつ卒業を告げに來し
79 春暁のつめたき釦ひとつひとつ
80 アネモネが咲く君が欲し君が憂し
81 春夜なり電車の床に散る名刺
82 バーのママの昔の写真蚩烏賊
83 春雲流るダッシュボードに足置けば
84 電車から見る春のリビング誰もみず
85 漂着のごとくわれあるさくらかな
86 チーズケーキの小さきミント春闌けぬ
87 くちびるにカップの厚し春のくれ
88 アパートが川へ落ちさう養花天
89 献花よりつぎの献花へ虻飛びぬ
90 ピロティ―に吹かるる落花開演す
91 遠蛙果肉のやうな夜が来る
92 死者は帰らずさくらの枝に垂れる蛇
93 春驟雨黒く大きな犬が来る
94 動物園の石の巨木や囀れる
95 なまぬるき爬虫類館日永し
96 しやぼん玉吹ききつて身のうつろなる
97 天井低きタクシー会社目借時
98 ジャニス・ジョプリン吊革握り聴く暮春
99 いちまいの鏡を信ず春の昼
100 蒼く碧く孔雀の歩む春の月

- 1 宝船よりかつかつとハイヒール
- 2 やはらかくボール抱へる春着の児
- 3 絡まりしコード気になる七日かな
- 4 手のひらに寿司屋の湯呑み寒土用
- 5 おれよりも博識な奴鬼やらひ
- 6 探梅とふたり分け入るけもの道
- 7 旧正月カフェ閉店の取り消され
- 8 父母未生以前へ牡丹雪くづる
- 9 春浅し夫婦は黙の中にをり
- 10 初めての絵踏なんにも思へずに
- 11 再起動を求めてゐますふきのたう
- 12 ニッパの刃先に濁り二月尽
- 13 蒼天に点々と花ミモザ
- 14 高麗のありし栄枯や落味噌舐む
- 15 線量はかすかに残り春の泥
- 16 北窓開き首塚の風久し
- 17 引鳥の十字架なして小さくなる
- 18 丁字の香強し変数宣言す
- 19 落第すこの店のこの塩ラーメン
- 20 行く人と来る人の間(あい)黄砂降る
- 21 椿落ちて木魚のビートなだらかに
- 22 陽炎やぬるりとバスが現れて
- 23 切れかけのマーカー重ね塗る春愁
- 24 暮れ時のめまい俄に花の雨
- 25 春雷や箸を逆さに持つてをり
- 26 酒瓶にリラ挿し残し退院す
- 27 憲法の日 of 青山のジャズハウス
- 28 かはたれの薔薇充電を了へんとす
- 29 カーテンの藍色深き傘雨の忌
- 30 緑陰の縫い目ドリブルする少女
- 31 ペチュニアとパフェ収まらぬけど撮りぬ
- 32 五月闇ふかしオフィスの疎に馴るる
- 33 紫陽花の蒼くて株価乱高下
- 34 パラフィンをなぞる指先梅雨晴間
- 35 父の日やマイルス・デイビスかかる昼
- 36 髪結いの亭主の煽る蜷酒
- 37 梅雨タベ捲りし袖を戻さうと
- 38 時の日にことさら鈍き昇降機
- 39 アイスティー無糖で恋のはじまれり
- 40 貸ボート上野の胎を縁取りて
- 41 風鈴にからあげ萎ぶ情事あと
- 42 骨数本折れても団扇働ける
- 43 たまねぎの虚のざんと截たれけり
- 44 炎帝や崖は泡立つほど白く
- 45 電線の残されし街夏燕
- 46 すんなりと砂へ潜つてゆく蠍
- 47 お御堂へ入道雲へつづく道
- 48 ヒートアイランド火星は青夕焼け
- 49 火取蛾や弧を為しかけて落つる尿
- 50 だるまさんがころんだ白き壁に蜘蛛

- 51 野馬追のドローン前後左右上下
52 くまモンに手を振りかへすパリー祭
53 祭鯉のかたさ神輿と共に過ぐ
54 咎もなく殺されにけりごきかぶり
55 方形の器(き)におさまらぬいうれいは
56 グラジオラスを愛でる骸や砲の音
57 干瓢を干して時効を迎へけり
58 轟音に醒め洗濯機敗戦日
59 けふのまま落ちゆくものに白木槿
60 暮れなづむドウオモの壁のはたはたは
61 かなかなや囃子に異国訛りあり
62 お陽さまの代はりに死ねり牽牛花
63 派遣ではお受けかねます女郎花
64 月昇る集中力のなき家路
65 一人過ぎまた一人来て曼殊沙華
66 柘榴食ぶデーメーテール追放の
67 舞茸はもつとモダンになれるのに
68 ハイウェイをいつ側向けど芒原
69 選挙ポスター芒に顎をくすぐられ
70 露草やシナモンティーの濃くなりぬ
71 秋蝶のなにかを追うて去りにけり
72 其方より見つめてをらむ虫の闇
73 浅煎りにせむ長き夜の水曜日
74 天井に蓑虫ぶら下がる残業
75 木犀の香に病巣の在処知る
76 鴟の贅縁なき衆生ならずとも
77 倍音をなす栗飯の栗と栗
78 雨がもみぢ葉がノートルダム寺院
79 そつけない離婚届や夷講
80 枳の実を投げてかの地の手榴弾
81 スーパーのハロウインの黄を素通りす
82 木枯らしやメトロ路線図膨張す
83 引越しや埃も冬虹も連れて
84 水涸れて食器の崩れさうな棚
85 背骨めく白菜の芯煮られ萎む
86 半跏思惟して生姜湯を啜る吾子
87 竹馬の倒れんとして進みたる
88 爆風の赤をも削がれ冬の庭
89 落葉搔くここは駄菓子屋だつた家
90 野の芝の枯れて曼荼羅模様かな
91 外套のいつもは気にならぬ解れ
92 あんまりによく晴れてゐて枯野かな
93 背景を出づるや入るや白兎
94 凍滝にうらめしさうな先細り
95 遠ちに消えし狐火近ちに灯りけり
96 冬の陽を溜めて黒曜石は闇
97 冬空になんと不思議な雲だらう
98 歳晩のスカイツリーを波打つ灯
99 年の湯の栓を抜きけり躊躇はず
100 何枚も葉を挟む去年今年

- 1 鯉幟雲なき空を余さざる
- 2 麦秋や土蔵に櫓の並べられて
- 3 牛蛙星降る夜を鳴きとほし
- 4 時の日のパスタの先に火が移る
- 5 紫陽花や尾灯の触れてつと止まる
- 6 右の手を梅雨の易者に貸してをり
- 7 無風とも蜘蛛は日に透く糸を掛け
- 8 蜘蛛の囿やはづれて揺るる贅の脚
- 9 文字盤に天道虫を歩ましむ
- 10 白日傘鳥居次々見えてきて
- 11 珈琲にソフトクリーム巻き了る
- 12 毛虫の木署名一筆してしづか
- 13 車窓より海撮りて消す帰省かな
- 14 ハンカチーフにはづれし鈴を包みたり
- 15 物干を何もなき日や大南風
- 16 赤子なに見てもわんわん兜虫
- 17 冷麦や恋せぬことも煩はし
- 18 踊場にかなぶん落ちてゐる拾ふ
- 19 蝶二頭触れず老いゆく夏の川
- 20 濡れ乾たるズボンの裾を戻したり
- 21 川底を浚ひ滴る捕虫網
- 22 仰ぎみる葉擦れ病葉裏おもて
- 23 つい落ちし沙羅のにはほへる雨の門
- 24 短夜の鉄扉揺らして鳴らしけり
- 25 巴里祭の窓一点を磨きをり
- 26 人形の豊かなドレス腰の螺子
- 27 屈みゐて山蟻の影我が吞む
- 28 天草の晩夏の橋の荒斫り
- 29 糊代に糊の角立つ残暑かな
- 30 夢二忌の濯ぎて白き砂糖壺
- 31 桃購ふて町中の鏡ににこり
- 32 馬鈴薯や精力剤の蓋が金
- 33 唇は西瓜に冷えて匂ふかな
- 34 掴み取る目覚し時計涼新た
- 35 方々に芒散らかる花瓶かな
- 36 ひんがしに花干す家や墓洗ふ
- 37 木犀や町の医院の表門
- 38 止めてきし自転車おもふ根釣かな
- 39 三毛猫の三毛の具合やらふらんす
- 40 鳥渡る余白明るきファクシミリ
- 41 眩しさになるまで塔を見上げけり
- 42 秋晴や町の雇用を煙突す
- 43 みづいろの軽自動車に栗積みぬ
- 44 普段着に時計ぎらぎら菌山
- 45 靴下の白く短く天狗茸
- 46 松ぼくり日を分けあうて鳩すゝめ
- 47 秋深し匙に二三のひよこ豆
- 48 傘も本も開かず終ひ宿の月
- 49 鴉鳴くやチーズに濡らす麺麴の片
- 50 畳むには美しき小箱や都鳥

51 噫ひとつ胸のをんなを抱き寄せて

52 助手席の膝にコートの二つ折り

53 口に藻を垂らして鴨の浮ききたる

54 鴨流れつつ身震ひや毛繕ひ

55 黒海鼠砂流れつつ砂被る

56 牡蠣を剥くナイフに曇の空が照る

57 風の日海豚笑ふと歯がずらり

58 クリスマスローズに金の病斑来

59 初空や鳥濡れず飛ぶこゑのなか

60 解体の工事現場の注連飾

61 初夢を聞かれて長き犬といふ

62 餅花や常鳩見えて鳩時計

63 瞳より大き青木の実をくはへ

64 雪晴れて肉屋に底なかりけり

65 寝かさるる梯子の長し厄払

66 雪吊の張り詰めながら松の先

67 輝ける泥ぶらさげて葱真白

68 包丁のすこしの葱を濯ぎけり

69 寒雀睦むとみえて争へる

70 二人して手ぶらの影に寒鯉来

71 理容師は雪の岩手に帰るらし

72 雪原を来て犬と犬吠え交はす

73 いろまちの墓地の続きを蜜柑山

74 蠟梅や実家は部屋を余らせて

75 暗幕の継がれて広き涅槃かな

76 花ミモザ製氷皿にみづ溢れ

77 恋猫や川に聞こえて寝返りぬ

78 きさらぎや硝子が窓の昇降機

79 CDの裏の埃も彼岸かな

80 卒業の手首に軽い紙袋

81 対岸のもう一本の辛夷かな

82 テニスコートの隅濡れ残る春の昼

83 てふ去りしばかりの蜜にてふ来たる

84 内示もうすぐ嗽のみづに淀みなく

85 貝寄風や望遠鏡に睫毛当て

86 足音を鍵の音混じり黄水仙

87 嘶きの小屋にくぐもる弥生かな

88 食みゐたる仔馬の目まで草の丈

89 カフェインの効かぬ身体に花の冷え

90 遠い木に星の隠れて余りある

91 春の浜踏みし小枝の跳ね上がる

92 蜜蜂やぶら下がりゐて羽と蕊

93 ピザ既に切れて運ばれさみしかり

94 日蝕の額に風を吹かせつつ

95 霾やぶつかり合はぬビルディング

96 みづうみは花見の頃や喉を病む

97 少年が転んで起こす一輪車

98 渡りたき橋は頭上や四月尽

99 小走りは人とが愉し春の月

100 紙芝居ほどの陽だまり蓬餅

- 1 遠山の春の灯それぞれに他人
- 2 ともだちのゐないともだち桃の花
- 3 海市見たときは家族でそれつきり
- 4 迷ひたくなつて遅日の知らぬ道
- 5 教室の湖心にひとりゐる四月
- 6 人間は夜に匂ふや花枝垂る
- 7 磯巾着も少女もひらきゆく月夜
- 8 口内炎は春雷の味がする
- 9 穴に顔入れて撮らるる目借時
- 10 半島の首夏を一望する機内
- 11 コピー機の紙吐く匂ひ薄暑の夜
- 12 虹消えるまでは家族のふりをする
- 13 浴衣着てひとつの既製品となる
- 14 日章旗垂れ梅雨寒の裁判所
- 15 しばらくを生きる仮定として金魚
- 16 水泳の声の聞こゆる保健室
- 17 くびられてゐて風鈴の鳴りどほし
- 18 精神科女医に飼はれてゐる水母
- 19 三階の窓にトルソー夏休
- 20 ロボットに寂しがられてゐる晩夏
- 21 爪切りて爪見失ふ残暑かな
- 22 暗渠へと水のゆがんでゆく墓参
- 23 鍵穴の秋思が鍵を噛んでゐる
- 24 チョコの空箱嗅いでゐる休暇明
- 25 痛さうなところから桃剥きにけり
- 26 ゐなくなるまでは花野を子どもたち
- 27 居留守してつくづく窓を小鳥かな
- 28 面接終へ秋晴といふがらんだう
- 29 あたらしい父は野分の夜を来る
- 30 檸檬の孵化を待つてゐる不眠症
- 31 秋光の丘に教祖のやうに誰
- 32 筆洗を紺しづみゆく夕月夜
- 33 はつふゆの街を主役の歩き方
- 34 ドライヤーの中を火花や神無月
- 35 包丁のいろ冬海も母の眼も
- 36 定位置に戻るコートの男たち
- 37 妹はただの人形クリスマス
- 38 へびのやうに来て熱爛のにほふ息
- 39 教材としてよき氷柱撮りにけり
- 40 人ちがひされ風花の時計台
- 41 シェービングジェルに春遅々たる気泡
- 42 愛の日やときどき痛いハリネズミ
- 43 薇の濡れて古生代の匂ひ
- 44 とほまはりして卒業の月やさし
- 45 啼くやうに斜陽が柏落葉まで
- 46 錠剤の喉をくだつてゆく遅日
- 47 乱痴気のごと春暁のハムスター
- 48 花冷のロフトに女匿ひぬ
- 49 鍵かけて春の夢より戻りけり
- 50 採尿を待たせてしまふ目借時

- 51 排気口より臭ふラム肉春暑し
52 ちかちかと落花あまやかなる頭痛
53 はつなつの夜明けは水族館の色
54 古文書も焼酎もある教授室
55 墓なかせてみる抜歯窩なめてみる
56 立ち読みの背後香水通りけり
57 後輪は蛇の骸を避けたるか
58 愛玩物としての妹みづでつぱう
59 食卓にマネキンの首夏休
60 飲み干せば底を覗いて海の家
61 土星の匂ひ睡蓮の昏き水
62 空蟬の減らぬ静かな少年院
63 ひたすらにそびらを追うて揚花火
64 洗濯機の渦を気の済むまで秋思
65 まばたきのたび藤袴ほつれゆく
66 蜉蝣のひらひら不採用通知
67 探されるためコスモスの中にゐる
68 蚯蚓鳴く六十刷になほ誤植
69 ベンチにて小鳥数へてゐる遅刻
70 いつせいに家族をやめる花野かな
71 保護色を得て新月の街を猫
72 ひりひりと生姜仮病の昼闌けぬ
73 非常灯点く鶏頭が濡れてゐる
74 蓑虫や人はこはれたときに鳴く
75 無花果を生殖器ごと食べにけり
76 東京を逃げ来て月の視野にゐる
77 流れ星放ちてネオンテトラの死
78 檸檬まる齧り鎖骨が羽化しさう
79 黄落に人を並ばせチョコの店
80 一円玉に小さき緑青冬はじめ
81 永遠や兄は小春の野をどこか
82 凧を来て雀荘はガラス張り
83 極月の首から下げる常備薬
84 クリオネの頭の割れる開戦日
85 葉牡丹の隣家ゆかしき闇のあり
86 ぼんやりと父の点在する枯野
87 化膿してなほ狐火の余臭あり
88 春浅し音楽葬に千の花
89 職安を出て黄梅が目痛い
90 くろぐろと生家の濡れてゐる雪解
91 蛙鳴きそむる淫夢のをはりぎは
92 それを見る女躑躅を蹴る男
93 初蝶を忘れぬための指である
94 花の夜の人形の口ふさぎたる
95 かはたれをこはれゆく子やほととぎす
96 杏子酸し十四歳の嫉妬ほど
97 梅雨寒ただよふまんばうてふいぎやう
98 世界とは疎遠プールの底にゐて
99 もう来ない人の卓上扇風機
100 手も首も無くてドレスを着せ晩夏

- 1 朴落葉拾い集めて一つ選る
- 2 鳩教授は例の着込み方
- 3 初氷朝とは夜の行き着く場
- 4 一つには風邪移しあう間柄
- 5 マカロニのための深鍋癒える風邪
- 6 冬の夜は夜のバツハに聴き入る目
- 7 降る雪が記憶の雪に掬り替わる
- 8 たまに喫うたばこに酔う日三の酉
- 9 挫折して銀行勤め年忘
- 10 続かないはずの日記を購いバスに
- 11 水仙のたとえば自嘲した匂い
- 12 おでん鍋言えない過去と言える過去
- 13 マスクして待つ相方に警笛(クラクション)
- 14 司書業にハンドクリーム必須という
- 15 寒明は雨が濡らした薔薇の棘
- 16 空の下二月も末の跨線橋
- 17 卒業期仕事のあとに向かうザラ
- 18 婚前なぜか切ない街区霏れば
- 19 事務仕事虻は暴れて窓の外
- 20 枝枝が萌え立つ頃の河畔林
- 21 ぶらんこに座り悩むと灯が点る
- 22 翌朝は浅蜷の舌の弛みよう
- 23 花のころ今日の居場所の喫茶店
- 24 コロッケのもうない肉屋のどかな日
- 25 新入りの名刺発注して今日は
- 26 町町の冷房需要誰を恋う
- 27 蒸す夜をレインウェアの内曇る
- 28 或いは名もない詩人のノートを貪る紙魚
- 29 高階は百合の蕊摘むピンセット
- 30 人に欲店は無数のキャベツを積み
- 31 墓狂信がもし自死招けば
- 32 気圏の底にヨットハーバー暮れなずむ
- 33 吹奏の一人川土手朝曇
- 34 摘果期は林檎畑の茂りよう
- 35 ウォータースライダーの叫び遥かに兆す雨
- 36 吊忍時は急がず歩むもの
- 37 爽涼と蒼を含有して夜は
- 38 夜機内機長神有月を言う
- 39 雁渡表を紺にした湾の
- 40 まるめろの実に量感を与える灯
- 41 まるめろは追熟までに二度描かれ
- 42 寸寸の雲一片の爽やかに
- 43 月光の係累として卵ある
- 44 片時は雨が潤す檸檬の庭
- 45 償いの檸檬ケーキの口当たり
- 46 一入の深縹空冷え込む日
- 47 枯葎眠りは時を止め得ずに
- 48 レイト・ショーまでを珈琲冬の入
- 49 おはようと言う息白く交じりあう
- 50 人は居て雪降る町の眠りよう

51 残雪が標高三千の標(しるし)です

52 卒業のあとの仄かな焦りです

53 鍵、資料、定期券、傘、余寒です

54 東京を冴え返らせた雨量です

55 弟に鰻をおごる日永です

56 のどかにも風力7(なな)の岬です

57 遥かでふっと何か飛び立つ霞です

58 鵜沼が虹に統べられる現下です

59 行くあてのない日々の暑さです

60 あじさいもいつか濃いめの祠です

61 あめんぼの足元凹む遥かです

62 旧友を拾いに向かう白雨です

63 許されるための彼へのすいかです

64 手花火の火が零される響きです

65 差入が届いて憩う九月です

66 内海は気圏の冷える途中です

67 寝過ごした十一月の情緒です

68 ゆらゆらと川のきらめく熟柿です

69 鈴懸も落葉のころの訛です

70 細枝のすっかり氷る未明です

71 ゆきひらが沸くまでの間の小蕪です

72 グラタンはいかがと言える季節です

73 呟くと唇湿るマスクです

74 栈橋が端までしみた時雨です

75 辞めどきを互いに逃すおでんです

76 目撃という語冬木が撃たれること

77 厳冬期鋸屑も木の匂い

78 予防接種につぶれた半休今は夜

79 セーターもたばこの匂い抱きあえば

80 早春は餅屋に響く掛時計

81 α 星微量の青み冴返る

82 閃きを燕に託すこと水は

83 孤独とは初蝶纏う路線バス

84 吹き寄せに黒豆まじる花曇

85 バルーン・ドッグが萎れるまでの日々を思う

86 面影は近所の大湯椎若葉

87 残響のボウリングピン梅雨の入

88 構内は夜の茂みに溺れる灯

89 炎天を何か極まる無と思う

90 あんみつを分けあえば午後勤め甲斐

91 鮎桶を二重にラップ変わる職

92 夕薄暑校了後のゲラの嵩

93 空蟬を幹から剥がし置いてある

94 北国は夙に蛸読み耽る

95 水の秋孤独が覆う海の上

96 つづれさせknockもせずに夜は来て

97 完全を見限ることを烏瓜

98 声を持たないトルソーと病む雁行と

99 黄落期泣ける映画に泣けない日

100 落葉を見届け得ない日が一日

- 1 鳥啼けば柚子いろづくやタまぐれ
- 2 葱買うや乾きつつある土のまま
- 3 豪雨つづく窓をみている焚火から
- 4 枯野行くや見え隠れする鴉の巣
- 5 枯野行くや川の源流すべて貧
- 6 雨降れば枯野を失せる青い鳥
- 7 鴨うてば夕日が沈むたちどころ
- 8 日没や鴉かたまる森の影
- 9 自動ドア門自動ドア注連飾
- 10 花柄のシャツで二月の川あるく
- 11 椿落ちて空つぎつぎに厚い雲
- 12 梅咲けば雲に隠れる鬼ヶ城
- 13 真っ青に晴れ白梅にすこし雲
- 14 梅にじむ夕暮れに鳴くからすたち
- 15 春の雲山に隠れる待ち時間
- 16 象の夢象の口から春の雪
- 17 包丁を振り翳すとき下萌す
- 18 下萌の夜に船体が不安定
- 19 しゃぼん玉はじけて絞り出す叫び
- 20 春風に帆や沖に立つ立派な木
- 21 白魚をとおして雲を見つめる日
- 22 白魚が濁って遠い国でテロ
- 23 工場長つねに見ていて目に春雷
- 24 起床から眠りにもどる花菜かな
- 25 春雪の空を眺めるマルチーズ
- 26 永き日の口をひらいている仏
- 27 蜂の巣や翅音が朝の海市から
- 28 蜂の巣のまわりに蜂とまわりの目
- 29 春霖の町のすべてがトタン屋根
- 30 菩提寺の鐘の音アネモネの方へ
- 31 春の闇振り向けば鳴る首の骨
- 32 春の闇から葬式のコマーシャル
- 33 滴りの途中で入るコマーシャル
- 34 トンネルは滴るところどころから
- 35 愛鳥日炉心融解して多忙
- 36 香港は人がよく死ぬ梅雨に入る
- 37 神代から茶畑に居るマスコット
- 38 街道の空をはみ出る榎かな
- 39 泡はみず炭酸水は緑陰に
- 40 万緑の牛を林道へと放つ
- 41 素麺のすべてつめたくうしろめたく
- 42 水眼鏡してアクリルの向こう側
- 43 出水町中漂っている儒艮
- 44 泣き終えて烏賊釣る聴力検査室
- 45 ゆっくりと開ければ怖い冷蔵庫
- 46 道はバネ押し寄せてくる烏瓜
- 47 古書堂の糸瓜であればすがるごし
- 48 寝過ごして南瓜を抱けば水曜日
- 49 動物のフィギュアすすきのすきまから
- 50 自己流で前髪を切る野分かな

51 月瘦せて台湾風の御漬物

52 零余子こぼれて空覆う戦闘機

53 百万遍通りときどきこの踊り

54 原発の周りを踊る大和かな

55 靴下は脱ぎ捨てられて折り鶴に

56 みんなして冬の炉心に手を翳す

57 遠くからどんどん増える焚火の手

58 焚火して煙の影が水中に

59 囲炉裏の外も囲炉裏の中も雪の中

60 このポテトサラダたちまち雪を呼ぶ

61 雲から落ちて石路から落ちて水の玉

62 喜びは怒りに水涸れの遠足

63 助手席にマネキン咳をして待たす

64 順番を待ち順番がきて噓

65 串カツを食うみんなしてマスクして

66 舟に触れ降る雪に触れ酔っ払う

67 降る雪は水面へ沖に黒い船

68 各地で地震アングラの酒は火事

69 冬眠の途中で詰まるすべりだい

70 御降の掌からこぼれる御釈迦様

71 参道の奥まで続く鼻の穴

72 人参を齧り筋肉調律す

73 山茶花や礼拝堂にアジフライ

74 探梅の時間分担する髭剃り

75 歯磨きのたちまち雪のまんなかへ

76 赤い服いま白梅のまんなかへ

77 プチトマト大食堂のまんなかへ

78 灯りを消して 眠る どこかの 火事 消して

79 山茶花がどっと 笑って 疲れて 枯れて

80 椅子は黒 雪 降って 部屋 売って 雪

81 薄い食パン 竹切れれば 雪 降り続く

82 真っ暗なバス停 小雪 赤い傘

83 髪型も二月 はじける 僕の顔

84 点灯の電気 寒波が知を襲う

85 心臓の噴火 寒造の休暇

86 鼻に穴 炭焼小屋は施錠せず

87 嗚咽 青空 カリフラワーはなににいろか

88 梅 散って ビンタをされて 笑い合う

89 予定に臆 平均台でレンジチン

90 棟梁の仕事 釘打ち 帰る鴨

91 空に風船 黄色の次は 赤 と 青

92 オフィス メモ 散らばって 雲は夏

93 複式学級 夏風邪で 減る 椅子の数

94 古仏寺で休む 緑陰 鯖缶と

95 蔵掃除 梅雨 あいみよんのラブソング

96 夜に霧 竹輪がやってくる 時間

97 掃除する妻 裸 我 素っ裸

98 ポーランドあたり朝顔 葦 真っ赤

99 吸入家族 空 澄んで 水 澄んで 寝る

100 一の窓 二の窓 三の窓 黄落

- 1 恋人の井戸を引き受け春の月
- 2 雪虫を不眠と呼べばつくづく閑か
- 3 夜に手をひらけばひとひらの凧は
- 4 北窓をひらく最初の指になる
- 5 雛の目をほどけば名を帯びてしまう
- 6 雨に目が混じりしずかな苗木市
- 7 仮縫いをほどき忘れて木の芽時
- 8 熊穴を出て空き箱をすこし買う
- 9 春蝶を見逃している持ち物検査
- 10 啓蟄やともだちのきれはし拾う
- 11 裸婦像の熱を孕んで春一番
- 12 海胆の棘いつも反響してこわい
- 13 遠くから唇がくる潮干潟
- 14 雨音の代わりに苗を売っている
- 15 逃水の裾を掴んでいるような
- 16 雲裂けて海月の傘の中の朝
- 17 くちなわの潮を紡いできたかたち
- 18 とことわの食卓に漂着する鈴蘭
- 19 麦刈は空を攫ってゆく音か
- 20 耳鳴りに聞き入る真昼姫女苑
- 21 万緑へ非常階段透きとおる
- 22 動物をはみ出してゆく五月晴
- 23 時の日のながい背骨に水を遣る
- 24 やまももを摘む包帯の巻くからだ
- 25 ほうたるの消息へ水音の孵化
- 26 あめんぼの鼓膜ほどけてゆく雨滴
- 27 水番の耳ふくざつに雨を編む
- 28 草刈りの朝から夜へそそぐ鐘
- 29 鉄柵を辿れば日暮れ額の花
- 30 夕焼を汲んでエレベーター昇る
- 31 雲海に戸籍係が住んでいる
- 32 鍵のように手を失くす鬼灯市
- 33 色鬼を抜けて色づく蟬時雨
- 34 かなかなのたなびくそれからのかなた
- 35 さよならのあとに芒を聴いている
- 36 花野来て笛の穴より多き指
- 37 夕霧の三叉路に立つ新婦かな
- 38 恋人のいこと産んでみたき桃
- 39 編み込みをめぐる陽のすじ秋の草
- 40 老蝶や息を殺してかけおくり
- 41 鬼灯を這い出て夜を量り売る
- 42 藤袴調べのような舟がくる
- 43 舟を舫えば雪迎え睦みあう
- 44 鏡を剥けば林檎の起こすことすべて
- 45 檸檬切るだけの結婚なら光
- 46 横顔は衛星に似て駅を待つ
- 47 かりがねを書き置き白き火口かな
- 48 水澄めば水を贖う紙の翅
- 49 舟葬の白菊だけが覚めている
- 50 初冬や切り絵にふさわしい港

- 51 雨降りの音に雨待つ鯨かな
52 山眠るあるいは数字の録音
53 半円の眠りを梟のよぎる
54 冬木が翳す象舎にささやかな病名
55 はつふゆの象 生まれつき窓だった
56 冬蝶を飼う永遠はソート順
57 暦果て給水塔に垂らす香料
58 行き暮れて白鳥の眼を塗りつぶす
59 遠火事の気配に長い正誤表
60 雪晴やパノラマ式の双子産む
61 狐火を交わす呼吸の見返りに
62 鳥の抜け殻として拾う手袋
63 寒月が通路を垂らす
64 観覧車氷り月から出られない
65 明星や無人の国に万国旗
66 明方の雪を蹴れば月の層
67 寒風や燃え尽きるまでが纏足
68 寒月の潤む水なき水槽に
69 水面に籠もる二月、未だ無記名の
70 採譜する指は毀れてゆくミモザ
71 焼野に沈める未返却の時制
72 風船を知った空から過去へゆく
73 吹く息にふえるジョーカー春動く
74 見覚えのかたちを崩す涅槃雪
75 対岸の人の薄目を雪崩かな
76 引鶴を仕舞うまぶたの満ち引きに
77 やなぎのめ空のぬりえはゆびでぬる
78 残響の為の指揮棒春の夕
79 体温をくぐれば藤は澄みわたる
80 (架空の画題)ささやいた順にエリカ
81 浴槽に生けた花束風光る
82 海の色わすれて鳥は紙細工
83 陰部の羽音が夜桜を蝕む
84 輪唱を抜け出て菜の花にふれる
85 飛花落花やがて折り図のなかの島
86 振り向けば夕陽に帰る牡丹かな
87 産声のように帆船の咲き残る
88 南風吹くひとのかたちの穴に船
89 青鷺の燃やす幾万の消印
90 微睡みの沖で蛍と番い合う
91 遠雷や貝殻骨に水を刷く
92 濡れにゆく小蟹は影を閉ざしけり
93 かもめに雨 ぬりえのようにせまい雨
94 蜘蛛の糸うるむ系譜のない水に
95 紫陽花の白を攫ってゆく夕陽
96 水蜘蛛を孕むまぶしい仮眠かな
97 からっぽでいると登山のほうが来る
98 郭公の鳴いて平らになるねむり
99 朝風のなかの付点の翻る
100 向日葵を見る横顔が空(す)にいる

- 1 折鶴に与ふ嘴春寒し
- 2 春立つや曲線多き角大師
- 3 下萌や木乃伊は文字に包まれて
- 4 楔形文字に棲みつく余寒かな
- 5 春遅々と遺品の時間揃ひゆく
- 6 鳥類を迎ふる草の青みをり
- 7 春塵やバビロンに飛ぶ松果体
- 8 春の水流るユディトの剣の先
- 9 折紙の獣連れ行く春の旅
- 10 踏切の先の踏切鳥雲に
- 11 天冠を被く古雛の指真直ぐ
- 12 法堂の黙に吸はるる胡蝶かな
- 13 囀や目瞑りてゐる歡喜天
- 14 コヨーテの檻の欠伸や春の雨
- 15 着ぐるみの中の仕事場春の虹
- 16 俱生神開く巻物へと桜
- 17 闌春や毛並よろしきスフィンクス
- 18 神聖甲虫(スカラベ)の閉ぢ込む翅や春眠し
- 19 花叢を音に遅れて翳の蜂
- 20 ふらここの紐ちくちくと吾を拒む
- 21 春愁や鯉の額のあらはなる
- 22 蝌蚪の尾の黒曜石ほどに透けて
- 23 磯開ニライカナイの風兆す
- 24 禁色に昏れゆく海や汐まねき
- 25 自在たる粒子となる師風光る
- 26 銀紙の丸め置かれしこどもの日
- 27 雑木を赦す王墓や風薫る
- 28 透明な戦争の街花空木
- 29 安土山礎石余さずさみだるる
- 30 大甕に目高飼ひたる背中かな
- 31 夕星や高野聖の立ち泳ぎ
- 32 潮騒に乗る老鶯の島訛り
- 33 茅の輪まづくぐり行きたる影法師
- 34 巻き切れぬ妖怪絵巻明易し
- 35 絵葉書の文字の濃淡海南風
- 36 革靴で虹を走つて来ただね
- 37 サイダーやパンサラッサの海の色
- 38 骨貝のすき間に滲む夕焼かな
- 39 夜店へと走光性の俺達は
- 40 星涼し百弦琴の音の粒
- 41 夢に入る子等に土星の涼しかり
- 42 路線図の隅の生家や羽蟻とぶ
- 43 地獄絵の寺の手水や白日傘
- 44 羅や嫦娥の奔る月世界
- 45 透きとほる河鹿の闇の無音かな
- 46 きらら虫千夜一夜に住まふらし
- 47 さらば処女にして寡婦なる甲虫
- 48 巴里祭さくりと麵麴の分たれて
- 49 砂場には楕円形なる暑さかな
- 50 日盛やメリクリウスの杖の音

- 51 八月の犀の蹄の丸みかな
- 52 残暑なほゲオルギウスの槍先に
- 53 聖母子のアイコンより出づ秋の蠅
- 54 秋暑し一反木綿悶え飛ぶ
- 55 海見えぬ人魚の塚や初あらし
- 56 花木僅みな透明の血を吐きて
- 57 鶏頭や八百屋お七の小さき墓碑
- 58 サイフォンに珈琲満ちて星今宵
- 59 仏蘭西革命半ばにして夜食
- 60 昔より遠き武蔵野月の道
- 61 牡羊のリュトンに灌ぐ月の酒
- 62 街にみな翳連れ歩く良夜かな
- 63 中秋の月へと潜る八尋和邇
- 64 長き夜やデルヴォーの絵の同じ貌
- 65 瘤ほどの角の狛犬秋うらら
- 66 秋澄むや鳥のかたちの飴細工
- 67 さやけしや極楽鳥の飛ぶ図鑑
- 68 螳螂の色定まらぬ新市街
- 69 天辺を欠く石塔や赤蜻蛉
- 70 駅寂びて神居古潭の水澄めり
- 71 団栗の無時間が流されてゆく
- 72 愚鳩(ドードー)の嘴太し鬼胡桃
- 73 葡萄酒の曲面状の秋思かな
- 74 弥生舟刻むる土器や稲穂波
- 75 妖精的距離感で生ゆる茸
- 76 師の越えし溟海広し石落の花
- 77 新海苔の軋みて海の破片めく
- 78 冬の陽の満つる五島の安息日
- 79 大鷹の蹴爪に水の暴れけり
- 80 木枯をルドンの気球飛びゆけり
- 81 セフィロトの木にも枯葉のありぬべし
- 82 手水舎に光を零す七五三
- 83 着膨れて地下劇場の闇薄し
- 84 吊るさるる鮫鯨吐ける晝の星
- 85 息白し小瓶に並ぶ岩絵具
- 86 湯豆腐の一個崩れてゐる涅槃
- 87 冬の星一個盗んできてあげる
- 88 梟の羽の裡なる夜の海図
- 89 掃除機のなかも冷たき今朝の縁
- 90 幼稚舎にサンタクロース懷疑論
- 91 流星群の海を鯨の迷ひ来ぬ
- 92 雙六のなかに無職である時間
- 93 閨房に歌留多の坊主はぐれをり
- 94 水滴や厨に水仙花のあかり
- 95 重力へ戻りて蝶の凍てにけり
- 96 寒月や飛行機の羽化始まりぬ
- 97 水といふ水に方角瀧凍つる
- 98 寒紅やみづのいちばんあをい時
- 99 風冴ゆる骨の麒麟に角五本
- 100 始祖鳥の尾骨の先に春兆す

- 1 須臾にして掌に雪片の仔細かな
- 2 水涸るる他人の犬を手懷けて
- 3 短日やひらきしままに花鋏
- 4 一睡のゆめの如くに牡蠣白し
- 5 空に見え街に紛れて冬木の枝
- 6 梟の時間を文字にしてをりぬ
- 7 住み馴れぬ居に春待つといふことを
- 8 春を待つ耳はひとひらふたひらと
- 9 水鳥や日当たる文字を眠く読み
- 10 一と雨の去るや笹鳴また繁く
- 11 畦焼いて誰の忌となくこの心
- 12 浅春の徒歩(かち)なれば水尾ひくやうに
- 13 下萌や身に添うてよき古靴
- 14 万蕾の尖りてやまぬ二月尽
- 15 引鶴や飲食(おんじき)に湯気尽くる頃
- 16 みなそこへ涅槃会の雨しきりなる
- 17 はゝがりや風強き日の黄水仙
- 18 汝が吹けばむらさき多き石鹼玉
- 19 匙にをるいびつな我よ春の風邪
- 20 風船を配る大人の糸がほかな
- 21 鬘鬘に影のほそらか春の雪
- 22 天秤の釣り合うてゐる春日かな
- 23 つばくらめ針をつかふ手いま高く
- 24 蝌蚪の紐緋鯉の波によくほどけ
- 25 かほ寄せて薬は細密春深し
- 26 名を呼べば耳や尻尾や五月来る
- 27 泰山木花に夜空の底ひ触れ
- 28 ぼうたんや一族の血の濃しうすし
- 29 あかときの舟青蘆をはなれけり
- 30 白服や四阿といふよき暗さ
- 31 再会のサイダーにはや泡乏し
- 32 日焼子に机は広くひやひやと
- 33 まくなぎの憚りも無き太柱
- 34 昼寢覚白いエアコン又も在る
- 35 新しき冷蔵庫来る日なりけり
- 36 くづし字を繻くやうに金魚飼ふ
- 37 涼しさや灯虫厭へる袖袂
- 38 そのうへを蝶交みをる茅の輪かな
- 39 先生と呼ばれし人の洗ひ髪
- 40 白鷺の休符めきたる青田風
- 41 水遊びする子に近く黒き蝶
- 42 白靴のひとと憶えて別れけり
- 43 おのがじし行き合ふ空に街低く
- 44 ひと周りして踊子のかほとなる
- 45 踊子やうつつの橋を踏み帰る
- 46 萩に風前髪を押さへて笑ふ
- 47 夜にひらく文の音する真葛原
- 48 糸のころや骸とも見え道の物
- 49 泣き顔のやうに西瓜のみづ残る
- 50 海青くとほき通草の見開かれ

- 51 秋の蠅はなれて秋の石のこる
52 啼き交はす間(あはひ)の水の澄みにけり
53 牡丹の根分すみたる手に煙草
54 鶉のこゑ闌にして葛隠れ
55 活版のくぼみほどなり梨の傷
56 信仰の扉の重く冷ややかに
57 鶏頭にかの天泣のひとしづく
58 毒茸と言ふときいつも声潜め
59 目瞑るや夜学の耳のひろふ音
60 花カンナ曲がればゆかり無き学府
61 汝が呉れし鶉のことも筆ついで
62 もう少し行けば日向や花八つ手
63 綿虫や幾年を撮る玄関に
64 晴れ続く枯蠅螂の日数かな
65 住み馴れて窓ゆく雲は冬の雲
66 冬麗の骨董市の遠眺め
67 鳩潜るかちかちかちとパフェの匙
68 去りがての顔に聖樹の明滅は
69 懐手鴨といふ鴨遠くして
70 青天に鴉ちらばる寒さかな
71 歌かるたあめのあふみのかな美し
72 手を拭ひ三日の犬に話しかけ
73 初旅の水尾にもあらむ向後かな
74 曇(どん)ながら降るものもなく若菜摘
75 ゆふぞらに紺兆し来る鯨かな
76 雪待つや心にやはらかいくぼみ
77 浮寝鳥ともに見しより夜の友
78 頭を垂れて寝しづむ人や窓は雪
79 宝物や冷たく暗く蔵したる
80 繻くにつかふ一日や水仙花
81 凍瀧や空なるままに花器古び
82 浩瀚に倦みたるこゑや冬籠
83 節分のさても雨落なるところ
84 立春の信号のふと大きかな
85 陋巷の訃や春風に片剥がれ
86 野を焼いて茶を飲んで人しみじみと
87 末黒野やはやをちこちの潦
88 見覚えは無く懐かしく御開帳
89 描かれて病に色や春浅き
90 雛壇の影の中なる赤い服
91 この道に又も出でけり春の昼
92 むらさきの一花に凝るも蜂の雨後
93 卯の花やつゆけきものに箒の柄
94 春日傘みづかげろふを容れやまず
95 穴掘るを犬の性とし花辛夷
96 装ひてゆく街中の桜かな
97 連翹や雨意にしたしく掌
98 鳥の巣を見て静かなる暮らしかな
99 消防車はくれんの道帰りけり
100 全集の何処かからすのゑんどうが

- 1 かかと踏んでジャージで桜満開で
- 2 折つて使ふ紙のスプーンさくら散る
- 3 葉桜の夜を立つたまま飲み干す水
- 4 夜はみどり窓のあちらに人のゐて
- 5 通話が見たい葉桜いつせいに窓を
- 6 泣いてもいいよ甘夏のふかふかの白
- 7 カーネーション人々の呼気混ざり合ふ
- 8 見て閉ぢる郵便受けや薔薇の下
- 9 まだ梅雨ぢやない雨ここにゐない人
- 10 藻の花とカーテン流れるもののための
- 11 あぢさゐやずらつと白い壁の家
- 12 あぢさゐの葉のごはごはと煮る布巾
- 13 明るいまま夜で梅の実どんどん落ちる
- 14 梅雨の夜の歪んで凍る保冷剤
- 15 守宮ゐて水栽培のすぐ乾く
- 16 さくらんぼじつと見るなど言はれて見る
- 17 南風吹くバターナイフのあかるい刃
- 18 木が鳥をこぼして涼しさうに窓
- 19 指の毛に雨やさつきの蜘蛛の囲にも
- 20 ゆふべの雨乾き残つて蔦青む
- 21 葉柳にちやうど弟くらゐの歳の
- 22 耳に涙が入る暑くて眩しくて
- 23 来てくれてありがたう蜘蛛そつと運ぶ
- 24 蛾が平たくゐる夕刊が古くなる
- 25 十葉や夜のをはりの鳥のこゑ
- 26 どの店も休みの町や立葵
- 27 プロペラの音歩みつつ差す日傘
- 28 バナナ買つて長い夕方信号機
- 29 蟬になるまでを見てゐて夜になる
- 30 ビーチサンダル真水で洗ふ日の盛り
- 31 パセリ散らした指をしばらく持て余す
- 32 あの蟬と思ふをととひ見た羽化の
- 33 歩くと暑い 月の出がはつきり遅い
- 34 彩雲や切つてトマトを溢れる種
- 35 窓のある封筒メロンの熟れてをり
- 36 さぼてんに花寝る部屋と食べる部屋
- 37 見せていい服日盛りの戸が開いて
- 38 掃き寄せて凌霄になほ色のある
- 39 散らばる蟬ビニール傘は明るい傘
- 40 葉と蟬の翅と混ざつて濡れてをり
- 41 風の庭へ出れば薄荷に花のやうな
- 42 朝顔の閉ぢて脚立の横だふし
- 43 来た人を木槿の道へ帰しけり
- 44 ゆふがたや水といつしよに買ふ花火
- 45 椎の葉のそこだけ若い九月の空
- 46 ポテトチップス筒に重なり秋の蝶
- 47 月と金星ここからは公園の外
- 48 刃を入れて円は扇へ秋の宵
- 49 マグカップ洗つて帰る良夜かな
- 50 低く平らな川面や秋の一つ星

51 ずつと丸い月だ返つてこない言葉
52 問はれれば答へるゑのころ草揺れる
53 皮ごと食ふらしき葡萄やよく降る日
54 柿剥くと雨の吹き込む風に変はる
55 軒ごとに鳩みて鳶の葉にしづく
56 鳥渡る鏡おほきく継ぎ目なく
57 木の実降る美術館さつさと閉まる
58 銀杏散つてしまへよオフィスの開かない窓
59 空は暮れて枝に残る葉の色と数
60 会話ずれながら進む落葉また踏む
61 初雪や肉屋に金のステッカー
62 間取図の戸の開いてゐる冬の虹
63 色として鸚哥(いんこ)は冬の鳥籠に
64 くしやみして左右の鳥の入れ替はる
65 室の花重ねて仕舞ふ軽い椅子
66 かさぶたのやうにワッペンいいコート
67 坂の途中におでんの屋台ばうとあり
68 十二月高速道路の幅の川
69 宇宙船出てくる映画クリスマス
70 冬日差ここにゐてこんなに過ごす
71 切れてる白菜親しい人にする返事
72 日当たりの床に本ポトフにセロリ
73 暮れかけのソファで寒くなく眠る
74 おやすみの月のマークの暖房す
75 草かんむりあげよう冬の小さな鳥

76 はばたく水鳥あひづちはうなづくだけで
77 思ひだす雪はしきりに川へ消え
78 雪にフードの人のむかうへ薄くなる
79 雪の生む階調月極駐車場
80 雪だつた水よどこまで行つても朝
81 水鳥のぽあんぽあんとみなくなる
82 足の向くはうへ臘梅の香のはうへ
83 梅のもう咲く目が合へば会釈する
84 トムヤムクンまみれの指や春の雪
85 巢のやうな寢床へ春の風を入れ
86 春風やおなかにひものあるズボン
87 パンも売る店や燕の来る角の
88 クレープ屋来てるねたんぽぽのちらほら
89 さへづりや急須がティーポットのとなり
90 春眠し台拭きに水吸はせつつ
91 浅蜷ひどくはみだしてゐる真昼かな
92 多肉植物春の夜の傘を畳めば
93 のどかさやみづたまりはくぼみのかたち
94 こでまりの花すれ違ふときの距離
95 沈丁の香よ街灯に輪のかかる
96 テレビつけてアスパラガスの束を解いて
97 咲きさうな桜コロッケ食べながら
98 花を見てゐる牛乳を買ひに出て
99 お向かひの門やや開いてをりさくら
100 屋上に花びらあれはなんのひかり

- 1 火を消して一身体の一世界
- 2 眼奥の昏きを隔ち羽音くる
- 3 優曇華の忘れを不二の辻に置く
- 4 夜藍の大花野より魔女二人
- 5 海百合の頸吊の木のえくれえる
- 6 唯一のこの青空やKARASHINAや
- 7 盲目の馬の進むや大枯野
- 8 くちなわの口より双の犬生れる
- 9 霞より出でる腕に鹿滅ぶ
- 10 神でないものが祈りを聞きにけり
- 11 遠雷や時間に棲まる雀蜂
- 12 接続に無があれば飛ぶ垂直の鳥
- 13 表象の眠りどこまでも象の皮膚
- 14 ここに茸あそこに茸のくらい夢
- 15 梟の調停ガラスの森を呼ぶ
- 16 蜜垂らす蛇を解剖けば割れ鏡
- 17 真夜中を透けつつ歩く哲学の鳥
- 18 六番の獅子の落下によく光る
- 19 移らじは重力にある詩歌の虎
- 20 王権をふたなりの鹿走り過ぎ
- 21 移氣の空木の不死の少女性
- 22 有限なれば枯野も炎月二つ
- 23 酷暑日の石を葡萄にする造語
- 24 造語として織られた襷に住む
- 25 冬眠を覚めずidéeの窓を開け
- 26 古遊戲や廻る花天のrivière
- 27 虎杖は斃れば火星の永遠廻り
- 28 破局、その昇りに生まるほととぎす
- 29 天上火忌の北天を廻りそむ
- 30 天上火忌を滑りだし桃に満ち
- 31 天上火忌のみず水を躊躇わす
- 32 天上火忌や蜂は飛ぶラテン語へ
- 33 天上火忌よ遊泳ようまのやみ
- 34 モル状の蝶に天上火忌増えよ
- 35 蟲泳ぐ天上火忌を言語とし
- 36 一行の痛覚はらい天上火忌
- 37 雀蜂忌濡れる真理に毛立つ夢
- 38 雀蜂忌その属性に帆を張って
- 39 天上も花鳥に捨てよ人語解
- 40 風月とならず天上火忌に揺れ
- 41 始点にして真円pommeがhommeを曳く
- 42 篡奪にして流麗étoileを並ぶhistoire
- 43 赤はグラネロを垂れて牡牛座のAとなり
- 44 手淫の上昇を帰して観音は……開く！
- 45 文語に降り来るものの遊牧とその回転
- 46 陵墓の虚空に南中の繭[コクーン]を置こう
- 47 青薔薇、盃の閨にさかしまは止まってゐる
- 48 森林を老夫におけば半月が遅れ
- 49 蜜蜂telepathこおりの星は鎖骨あたり
- 50 一角獣の偽史にふたなりを末裔する

- 51 比喩の火を踊るくらげが阻んでいよう
- 52 風の化石は羊歯を通れば顕生代が透ける
- 53 博物は冷酷を成す 白色のガレオン！
- 54 膾の楕円に沈めば月桂樹[ローリエ]が勃つ
- 55 夜汽車よおまえは眠りから想像まで貝を運ぶ
- 56 白樺が象徴のうしろに直線円の感性
- 57 女陰の忌erectはelectに満ち干きを牽く
- 58 舞台の真円軌道には歪みが答えよう
- 59 目玉の忌惑星を閉じその反復の詩
- 60 一つ天文接続の毛布に蒸気船くる
- 61 黒……に火遊びの神は純粹の犬を解く
- 62 外在する(遠雷、ヴードゥーの蜂は這い回る<色>)自我
- 63 夜汽車やソルボンヌに昇る歌劇のsūtra
- 64 芸術論の出来をアウシュヴィッツの林檎が隔つ
- 65 沛艾のアイコンや閉鎖病棟に蟲の遊泳
- 66 光線消失火に向う老犬が非時の躍動へ帰る
- 67 天文の森には白狐が非ユークリッドを降ろす
- 68 谷間の墜落に添える薔薇décréationは視てみた
- 69 いまわの火に鶴は延びフォーマルハウトを成る
- 70 地衣類の鼓動に明ける犬戎の暮れ
- 71 赦されざる(氷片にspermaは南中する)赦しを！
- 72 ソクラテスのidに一滴の<神>を落とす
- 73 宇宙飛行士はタンゴに亜時間を立てる
- 74 果実にAliceを追いLilithの天気雨
- 75 倒木のergoに降れば昇る伊奘冉
- 76 半球体の眠りを脱ぎ言葉の椅子に棲む
- 77 仙人掌に扉を吸い啓く千二十四畳
- 78 レオナルドの微笑をうつろぶねに流す
- 79 天使は斥力を凝視するひたすらのくれなゐ
- 80 幾何学の飛行に塔のでんぷん質が飢える
- 81 夏痩せて嫌ふべきものなお愛す
- 82 「季語ここに眠る(ページは変えないでください)」
- 83 おまへのゾンビ信仰を蟹が横切るよ
- 84 風鈴を売る風鈴売りを売るおまへかな
- 85 落ちる(風鈴の闇に手足や寝るをんな)檻樓
- 86 不具に書く自意識に書く星月夜
- 87 昇らないその七をどこに隠すのか
- 88 嫌ひだおまへが(とにかく)嫌ひだ(眠い)おまへが
- 89 数字の服を剥ぎ取れば八つ足の葉
- 90 だが会わねばならぬ灰の無き定型
- 91 水脈となり我が風月よ英雄よ
- 92 気嵐や浮力のままに大白鳥
- 93 綴ぢられて白光にまだ重き画家
- 94 大河その美の痛覚の距離[ディスタンス]
- 95 落陽にただ肉体の沛艾や
- 96 連峰を回帰を董ただ一つ
- 97 凍てる風凍てる唐檜に滅びつつ
- 98 雄鹿やや動き千歳の森動く
- 99 漏沙[すなどけい]未だ凍っていた背後
- 100 花鳥書の棲む兩岸や炎、我が

- 1 花位(かい)として薄い汽水の字は歌ふ
- 2 金縷梅のみなみへ泪みなぎらせ
- 3 梅咲いて関節を私語するちから
- 4 蠟燭のこゑ花鹿(はなしか)のゐない橋
- 5 花は首のうしろで睡る雛祭
- 6 竹の鏡をうすむらさきに沸く瞼
- 7 花篝風の世水の世袖を振る
- 8 絶景は皮膚にあかるい水位まで
- 9 春は底ぬけみんなむらびと品川に
- 10 うぶすなへ昏い眉間をもちあるく
- 11 野遊びの耳を飾つてまるで忌の
- 12 花はぬけがら楽器の方へ人は寄る
- 13 塩のぎりしあ晴れても深い蜂の脚
- 14 機器の熱浴び虻に漸近する僕ら
- 15 やまひつつ茉莉花となり夜を過ごす
- 16 緑陰にまぶたの透けるこどもたち
- 17 いびきして芒種の雨を蠟のやう
- 18 ほぼ夢の羽虫の浮かび肥る枇杷
- 19 みづかきを虹すばらしく抜けおちる
- 20 うはぐすり瞳孔祭を鳴る虚
- 21 蹄して夏どしやぶりの裸眼へと
- 22 透過する百合の身体で逢ひにゆく
- 23 ねむたさの晴れてこはれた蛾の模様
- 24 あるく息ごとの湿润する葉騒
- 25 上野からけはひの鳩も灼けてゐる
- 26 天上のくらい位冠も金魚かな
- 27 あぢさゐに木曾は煮えたつとほさして
- 28 泉まばゆく靈感はくらくら歩む
- 29 めくる頁はねる鳥ゐるすずしさに
- 30 うしろから濁るからだを泳ぎきる
- 31 炎帝の撫ぜる半目のけものたち
- 32 カンナの河原古びゆく齒で笑ふ
- 33 繭的にあたらしく火のかんばせは
- 34 秋虚ろ祝祭の首重くのべ
- 35 ぱれ一どよ棗が舌に瘦せてゆき
- 36 濡れぼそる木賊の奥に息をぬく
- 37 むなしくて布は瞼になりかはる
- 38 のどぶえと云ひ肉ひかる秋の窓
- 39 秋は瘦身触れたものから鳥羽へゆく
- 40 泪声ほやほやと野の鶉なる
- 41 荻の袖眼の奥を歌たちのぼる
- 42 萩に衣服を歌ふ手つきでこぼれだす
- 43 こどもたち光を啜る鹿の中
- 44 澄む秋はあばらのこゑで軋みつつ
- 45 菊日和まばたくたびに褪せて背は
- 46 感光の渦の鰭よさやうなら
- 47 来る鶴に糸巻きなほすぬるい部屋
- 48 燃えるたび鹿は麓をかきくらす
- 49 骨育つ厄日の雨を浴みながら
- 50 帰る燕にうすむらさきの木の感覚

51 孔雀から梵字あふれて秋の風
52 パラフィン紙ひよの盛りを入日して
53 まどろみのバス紅葉の関を北へ
54 なみおとが来て蓑虫はぜんぶ夢
55 時雨れては鏡の恍惚をよぎる
56 藻の日々を息白くしてみんなゐる
57 肉親よ冬あたたかを薔薇は澄み
58 枯れてゆく勿来(なこそ)に息をぶあつくす
59 雪よ暝ると鉄の音が落ちてくる
60 火をもらふ林は寒き鏡成し
61 窒息のすみずみまでを星は潮
62 毛布寄せてもひらがながひらきつづける
63 えれくところにか千々の夜とて花構(かこう)せよ
64 鯨やがて怠い千夜を音叉して
65 みなそこに寒波の届くふあるせつと
66 雪に曇る鈴を磨けば幻翅痛(げんしつう)
67 鬼籍せず月日ぷらちなして冬は
68 瞼腫れふかぶかと湧く梅の空
69 こゑの層辛夷の空のみなみより
70 鬱血の踵をもてば燕来る
71 からだ紺碧うづく雲雀を容れてゐて
72 まつはる蝶上着まるめてあかるさの
73 沼からはをとめつばきの来る葬
74 菜の花にゐてあんしんな嚙下(えんげ)せよ
75 つまり念鳥目にうつる花の川

76 花忘れ忌日ののちに張る皮膚も
77 ともす火の花伴(かばん)して喪は行列する
78 火ざかりの夜を亜名(あな)に呼びかはす
79 灯の渦に君らがゐない花曇
80 百千鳥光量があなたのうろで
81 鶺鴒原抄(うはらしょう)みづは肉眼よりとほい
82 琥珀して雨に記憶は声だらけ
83 鳴るからだ五月は花に降る雨の
84 暈あらはれ麦生にひびく水の歌
85 舌見せてやまひはればれ風の砂丘
86 恋情の草木の貌のふるへだす
87 婚礼のとほい額に翡翠は
88 下草の茂り日ごとにうるむ家具
89 ががんぼの飛ぶまひるまを抜ける髪
90 青葉騒籠目に暮らす魚の数
91 虹彩は速さにまはる罌粟の花
92 万葉に鳥の淡くて青水無月
93 薄荷糖はなやぐ梅雨の日を記す
94 ぶあつさを虹になれない攣る足裏(あうら)
95 麦粒腫(ばくりゅうしゅ)わたしが晴れる藻のいつか
96 夕立の中顔の紙めく僕たちは
97 つぐむとき緋鯉は星でなく滲む
98 炎昼のつまづく鳥といふ発語
99 日の濃さの鷺に世界はなんども膜
100 ゐなくなる暦は木々を刺青して

- 1 風葬や虎寒天に喉展(ひら)く
- 2 狼の屍を分ける人ばかり
- 3 火禽(かきん)来よ燠闌の極なり
- 4 天地の眸を廻る焚火かな
- 5 短日は風の兆も只ならず
- 6 陰茎に刹那の力牡丹燠
- 7 ほどきゆく紙片の舟や冬籠り
- 8 いざ野放白息を揺曳(ひるがえ)し
- 9 浜焚火彼を近々詣でんと
- 10 したわしき侘助程の小鉢かな
- 11 弥終(いやはて)の夕紅の冬の川
- 12 白という誠濃き色初雪す
- 13 冷たさの形に拾う小枝かな
- 14 オリオンをなぞりて嫁と姑は
- 15 しんとしてやがて冬木立と揺れる
- 16 縄綯や君もまた死に養わる
- 17 枯草に枯草を踏む歩かな
- 18 六花無尽の軋消えるまで
- 19 半纏でアタラクシアを逸れたる
- 20 かつて恋楓(ふう)の実殻を燠の上
- 21 タブラ・ラサ全方位なる初空の
- 22 型録(かたろぐ)の世に古歌留多美しき
- 23 初炊ぎ地雷や不発弾のことを
- 24 一月の一斧に伝う応(いらえ)かな
- 25 氷瀑にかつと歩むを嫁とせり
- 26 風花すなんのことなきつれあい
- 27 眼裏に待春の水あることを
- 28 うすらかに山を色なす冬芽かな
- 29 家楡を肉叢(ししむら)の水懐かしく
- 30 超常と養虎侍らす肥椿
- 31 落椿色欲忘れかけたるも
- 32 雉鳴きて雉と私ばかりなり
- 33 水を嚙むようなる梅の匂かな
- 34 漂着の甘橙や風烈(はげ)し
- 35 如月の三和土を月の面とも
- 36 春月や浦波に隈太々と
- 37 三生を貝寄の風ちりちりち
- 38 どの鉄も千年の砂水温む
- 39 慎膜に余す広さを水の春
- 40 引鳥の次へ引きしを束の間に
- 41 しずかにも燠闌や涅槃吹
- 42 花冷の円天一羽吾を鉤(かぎ)す
- 43 藤棚に暴君の骨譲られし
- 44 フリージア母は今祖母となり
- 45 まじろげば幼きままや花吹雪
- 46 真言の落花一片飛花の内
- 47 鳥風や米櫃満たす流元(ながしもと)
- 48 ほろろなる土釜の縁や入学す
- 49 夏未明眼に毒や戻りけん
- 50 朝涼や信号待の具(つぶ)さなる

- 51 ふれずとも手触を成し袋角
52 忘形や初夏の雨筆を拍(う)つ
53 包丁を拭いて外は水の五月
54 かく生きて今清狂と大瑠璃と
55 金魚玉夕紅に火酒(ウオトカ)して
56 一寸の火付の黙や不如帰
57 氷水ふと眼鏡の遺影めく
58 万緑に雨一切は加速せず
59 夕河鹿水の体に脳(なずき)あり
60 よき人よ私は水すましといいます
61 水馬の影今生の重さある
62 便追の唄を栞として降(くだ)つ
63 青梅の如きご縁に終られし
64 草蓮華魂に色あるならば
65 いなくなり白雲木(はくうんぼく)にいたような
66 外の刻(とのとき)に打水の音つもりゆく
67 額花に殺業思う仕方なさ
68 梅雨山の殊に奥より筆の香
69 ほうたるをその界限に住む人と
70 すこし経ち現の証拠も螢川
71 あなたより赤富士を為す光かな
72 鍛造の汝風草を生まれしや
73 炎天に朱一笛や置かれある
74 手花火の液(えき)の火となる力かな
75 破小屋に馬現れる大西日
76 炎風の魂一閃や佇みぬ
77 平生(へいぜい)と絶望の間を青蛙
78 生きにくく在り今夕(こんゆう)の美しき
79 ゆくりなき川を赤卒(せきそつ)そのように
80 富草の花を便(よすが)として忘る
81 ふと欠ける瞬(とき)の孕みや稲の花
82 なにもせずに大花野を去りぬ
83 始まりや糸瓜の水に連なりて
84 秋天は百の辺りを呆けたる
85 秒未満或る秋蝶と蜂谷(こめかみ)の
86 ひとつ手に倂(おもかげ)兆す田刈かな
87 君が再(また)七節目に好まれり
88 相槌の度蛸のこゑうねる
89 蛸や誰も笑ってはいない
90 九月尽全天一羽沓として
91 戸闔(とじきみ)を礼儀正しう火焚鳥
92 団栗や迅重(じんじゅう)と沼穿ちたる
93 虫入琥珀昔約束したような
94 宿木に焰点かばや風狂す
95 アポリアの如き汀を火の腕
96 月葬(げっそう)も哀痛定かには非ず
97 転生の大天蓋を白鳥燃ゆ
98 型式や母川は鮭を弔わず
99 胡乱なる歯車としてイ(たたず)めり
100 なにをたがやしてきたのだろうか

- 1 揮発してオーロラとなる蛙かな
- 2 墓出でて世界ふたたび哀しくなる
- 3 残雪の抽出といふ轍かな
- 4 太陽の蜂黒点で踊るかな
- 5 蜂の巣は滴りといふ落としもの
- 6 iTunesカード干潟に汚れてをり
- 7 春震へつつ紙きれを並べ置く
- 8 母校燃やす煙よ風と軋みつつ
- 9 時計の針がセダムのやうに垂れてゐる
- 10 ○●○●に謝つてゐる子供たち
- 11 眠りかたを毎夜忘れてしまふよ堇
- 12 春暑し吐き気は眼窩へと集ふ
- 13 リモコンや晴れて蛙の群死体
- 14 春はあけぼの犬の前世を繰り返し
- 15 自分にも中指見せてゐる暮春
- 16 俎板の傷の奥には蜬の眼
- 17 ムスカリの罅割れてゐて永遠に春
- 18 小説の字を焼く蝶の触角が
- 19 ヒヤシンス雨の速さで組み上る
- 20 須弥壇に座れる手中には臍
- 21 電球の錆びはじめだす春の風邪
- 22 蟻溺れて千葉のウヰスキィ啄木忌
- 23 嘴打ちの卵暮春の心臓は
- 24 断食月(ラマダン)や椅子流れゆく下水道
- 25 時計の中にまだ点滅してゐる鳥は
- 26 吊るされて裁判の香の墓
- 27 野苺の中にて鍵のやうに芯
- 28 燻製の蛾の舐めてゐる天衣かな
- 29 電車に揺られゐるとき滝壺を思ふ
- 30 独白や薔薇の起源をたとふれば
- 31 ふつつつとエキノプス燃えきれいな郊外
- 32 湯煙がちぎつて落とす暑さかな
- 33 読経の幻聴四葩の奥に四葩枯れ
- 34 切り株の古代を思ふ雀蜂
- 35 賞状を輪ゴムで縛る梅雨かな
- 36 Excelのセル食ふ紙魚や厨子仏
- 37 二つ目の宇宙コーラがもともとある
- 38 黒蝶の腹ぬるぬるとつまみきれず
- 39 蛾を食へば葉擦れの響く兄の中
- 40 見えぬ手に掴まれてをる海月かな
- 41 梅干や耳を離れぬ昨夜の経
- 42 太陽の綻びるやう日焼け剥く
- 43 蛞蝓むさぼる雨に重たき成人誌
- 44 茄子消えて机の残る四畳半
- 45 冷奴の乾いてゐたる仏間かな
- 46 空蟬に慄く昼月藍を宿す
- 47 アイスティーかき混ぜ透明な蛭が
- 48 羽蟻唸る丑三つ時のトランプに
- 49 うつ伏せに寝ゐる裸のくらく似指
- 50 枕元にミンティアの散らばつてゐる溽暑

- 51 下闇につるぶ犬猫やがては蠟
52 火酒叩くなづきの部屋を一つづつ
53 ぐつだりとしてパスワードめく孔雀
54 泣きすぎて老夫にフライドポテトの香
55 海峡を抜け泳ぎゆく山羊の幻覚
56 膀胱に小鳥を呼んでゐる夜明け
57 さやうなら産湯が言葉だらけの光を溢す
58 内側に栖む鹿が舐め脹脛
59 桃落ちて雨の木陰のいきれをり
60 カフェインの錠剤落ちてゐる墓参
61 電球を舐めて浮遊の秋金魚
62 夜長ふとシーラカンス電柱の中
63 火の中に裾濃の炎癩祭忌
64 紙礫の中の星屑ラ・フランス
65 秋思から外されてゐる動悸かな
66 檸檬まづしカフェのやはらかすぎる椅子
67 枝豆の電子レンジに捻れる音
68 閉秋の雨の昇降機は眠い
69 猿の掌がひらく夜霧に樹が灯る
70 死に水の乾きし椀に亀匂ふ
71 日焼けしてゐないところから枯れてくる
72 空港の花瓶の曇る潮騒忌
73 納豆や詩を捏ねくれば軽い脳
74 肥える生活(くらし)よ我が家は冬眠の洞穴
75 手袋が鼠のやうに唄ひゐる
76 心弁に綿虫が流れくる真昼
77 鉄製の墓碑聳え立つ火事見舞
78 大地讃頌鳥籠揺れ止めば氷る
79 着ぶくれてゐて胸焼けに鬱なる芯
80 ポインセチア置くだけでもう異質な部屋だ
81 闇汁のQのかたちのぱりぱりす
82 句碑のうらには木の根の瘤やアジアの鶴
83 蟹味噌の臭ふ枯木を洗ひけり
84 狐火の痰めけり墓前に聖書
85 化仏の中の私よMerryクリスマス
86 餅の中よりペンギンの生まれくる
87 初夢の腹から生えてゐる蛇口
88 枕の中の寒い湖面ゆ卵釣る
89 十字架や肺に残れる去年の息
90 曼荼羅や独楽の重心腫れてをり
91 Zoomの背後に婚ぐ山羊たち無へ逆流
92 水晶かあるいは麒麟の氷る糞か
93 ブロッコリー畑不溶の書を焚けり
94 まへがみの生えぎはの熱草城忌
95 エレモフィラにぐちやぐちやの羽の痕跡器官
96 煙草窩に冬日がちやうどよく填る
97 私群来 私の中の氷塊に
98 雪国のひとつは滅びをる地平
99 橋の裏で浴室全体が凍つてゐる
100 裏返されて急に冷たくなるのは死体も一緒だ

- 1 多数派の踵の下の蔭の臺
- 2 感情優先型社会芽吹きけり
- 3 生傷と赤き瞳に水温む
- 4 不溶性ばかりの海へ雪解す
- 5 戦場に勝者の不在蛇出づる
- 6 大衆の操作されゆく飛花落花
- 7 支配欲求の随に野火の行く
- 8 機械の手地雷原をも耕せる
- 9 苜蓿倒れしままの女神像
- 10 入学のまずは仮面を着けらるる
- 11 名前奪はれて四月馬鹿を演ず
- 12 原形を忘れし自我を接木せる
- 13 張りぼての理想郷にて蝶の昼
- 14 遺伝子に錯乱の有り猫の恋
- 15 亀の鳴くところ水没する秩序
- 16 生態系壊れ磯巾着乱れ
- 17 春泥を舐めし退行的進化
- 18 種族保存本能の果て春の夢
- 19 卒業の捕食寄生を完遂す
- 20 廃村へ合成樹脂の種を蒔く
- 21 滅びゆくまでを微睡む藤の花
- 22 遠足の列か未熟な行軍か
- 23 石鹼玉とふ球状の四面楚歌
- 24 自己増殖性の肥大山笑ふ
- 25 かぎろへる呪詛も罵倒も引き受けて
- 26 浅黒く鎖の跡の灼けてをり
- 27 草いきれ有象無象を反故とせる
- 28 なけなしの水に捕らはれの子予
- 29 溶液を満たして脳の帰省せる
- 30 攻撃は最大の防御か日焼
- 31 混沌の大言壮語炎天下
- 32 行政命令鉄槌も夏瘦も
- 33 向日葵の二三背いてをりにけり
- 34 人工の虹より放射線臭ふ
- 35 洞窟の烏合の衆に梅雨しとど
- 36 修羅道へ行つたきりなる大夕焼
- 37 服従を強要されし蟬の落つ
- 38 摩天楼歪めて大百虫と成す
- 39 百日紅蹴落とし合ひを隠しけり
- 40 逆説の波及みるみる滝となる
- 41 誰が為の噴水か問ふ者も無し
- 42 圧倒的多幸福感昼寝と錠剤
- 43 隔離されたる肉叢の涼しさよ
- 44 試験管に生まれ冷蔵庫に育つ
- 45 弱肉強食に飽きて箱庭へ
- 46 仮想敵としての火蛾を幾らでも
- 47 塹壕に山椒魚を匿へる
- 48 独裁者ごつこ毛虫の髭付けて
- 49 百物語軍事機密ぽつり
- 50 弱者から弱者へ懲の手榴弾

- 51 八月三十二日或ひは駆逐
- 52 全体主義的運動会に雨
- 53 権力の手招きしたる狗尾草
- 54 恥も外聞も無くなる虚栗
- 55 迷妄を浮かべて濁り酒を干す
- 56 非暴力的尋問の茸かな
- 57 行き違ふ億の沈黙黄落期
- 58 餓鬼道へ畜生道へ曼珠沙華
- 59 攻撃性除去処置を受け水澄みぬ
- 60 廃液の火口湖を行く鰯雲
- 61 穴惑瓦礫の王の密命に
- 62 鳥渡る声を殺して泣く夕べ
- 63 虫の闇さへも地団駄踏んでをり
- 64 自暴自棄迎へるまでを夜なべせる
- 65 諜報機関を辞すれば芋虫に
- 66 終はらざる地芝居無力無感覚
- 67 国境を血で引き直す野分かな
- 68 模範囚と言へど全員案山子なる
- 69 自らを滅ぼす者へしぐれけり
- 70 台風の懲罰房を打ち鳴らす
- 71 孤立することに疲れし星流る
- 72 無月にて己が臓腑を拾ひけり
- 73 筋弛緩剤の夜へと蚯蚓鳴く
- 74 銀漢も解体される途中なる
- 75 亡国の名を残したる草の花
- 76 成れの果て達を集めし落葉焚
- 77 見慣れざる手套即ち心理戦
- 78 捜査と称し鞆に爪立てる
- 79 鍵の部屋戒厳令の寒さかな
- 80 侵略者達の足音霜柱
- 81 脳髄に異形の潜む息白し
- 82 浸透戦術要員木の葉髪
- 83 肉塊か海鼠か選ばされてをり
- 84 相互監視もはやおしくらまんじゅう
- 85 着ぶくれて責める相手を探しをり
- 86 同調圧力の下へ冬眠す
- 87 楽園の愚者の等しく悴める
- 88 水涸れて不平不服をあらはにす
- 89 夜を征く警察権の吹雪けり
- 90 火事跡に燻つてゐる虚言かな
- 91 終末の設定資料集に咳
- 92 七首に切り裂く歴史神の留守
- 93 階級制度の何処にも隙間風
- 94 裏切りの数だけ噓してをりぬ
- 95 共食ひの末に海水決りをり
- 96 本営も最前線も冬ざるる
- 97 世界征服後の不毛冬休
- 98 証言者代弁者無く年の逝く
- 99 初夢を陰謀論に包みけり
- 100 致死量の快樂を以て返り花

- 1 君がため春野の薔薇にならずゐる
- 2 だつた手が芹を掴んでゐた彼方
- 3 手のきのふ雨が霞を流しては
- 4 あふれだす私語にぼんやり虻がゐる
- 5 紙焼けてほろほろと菜の花の群
- 6 のどぼとけひらく椿の唄の数
- 7 巣のくらさ蜂にときどき鳴る海が
- 8 書きことば泪が花冷にわかる
- 9 そよいでは鰭の四月を木と匂ふ
- 10 花卉して日の抜け落ちてゆく音の
- 11 風はむらさき肺の水位に根をさして
- 12 平熱の蜂が押しあふ木の空気
- 13 影は花口のかたちを引き寄せて
- 14 君晴れてをはりの春を藻が結ぶ
- 15 ばらの花てのひらに電波がとどく
- 16 あぢさゐの褪せて架空のこどもたち
- 17 花の名の南風になびきながら耳
- 18 雨が降る青鷺の音で映画は
- 19 口ごもる虹の匂ひは水草の
- 20 そこは翡翠空席いつまでもかがやく
- 21 なほざりの葉書は蛇の湖あかるい
- 22 涼しさの目の奥にはしごがかかる
- 23 風季ほら飛魚が水に遅れる
- 24 木は一位暑さの川がたちあがる
- 25 根が羽根へゆらぐ晩夏の日をあひだ
- 26 母たちの金魚ぼうつと濁る九九
- 27 白磁から垂れてみなみのゆめは実を
- 28 木管のさみしい舟虫の地方
- 29 眼のくぼむあなた泉と云ふいつか
- 30 唐衣西瓜の頃を川に棲み
- 31 浮舟よ口に棗の緋を交はし
- 32 仮枕手を流れ出て色は葛
- 33 くだる身のあなたを波になる菊が
- 34 明け暮れの散らかる川を骨は葉に
- 35 ささやくと濃い霧でかへして強く
- 36 萩は目に奥をひづめの澄みながら
- 37 まばたきをうすももいろの鴝の木々
- 38 満ちて野の花さいごの水の輪を鳥が
- 39 ここは月の間千の夜がどしや降りで来る
- 40 木犀をはなれて舟の野に覚める
- 41 置手紙汽水おもふと目が濡れて
- 42 回廊に椋鳥を育てて暗いまま
- 43 日々は泡鶉を沐浴に棲ませ
- 44 ゆふがたの垂れて街路は硝子の巢
- 45 出て銃の祭のやうにあかるい火
- 46 十月を巻きとる影にねむる鳥
- 47 淡水記(たんすいき)馬をつぐみを着て逢ひに
- 48 醒めてゆく秋は動画は眼をとほり
- 49 ともだちが歌ふほほゑみと透けて
- 50 ばら色にまた来て冬は額縁の

- 51 ひあたりに鴨ゐて水の戸をひらく
- 52 手には朱欒天動説の木を並べ
- 53 雪になる雨木は葉のなかで影を得て
- 54 水鳥に水銀計の棲むみやこ
- 55 あなたあれ着古した冬虹が立つ
- 56 忌の誰か僕を呼ばせて枯れてゆく
- 57 云ふ人の舌の鯨の暗いこと
- 58 沼は雑音うすい毛布に手がたしか
- 59 恍惚が雪になる間を窓のうみ
- 60 瘦せてゆく母をほどいて川はほら
- 61 霜の木のいつかが萎えて帆の白さ
- 62 糖蜜の鳥へほどけて海は冬
- 63 耳飾りかもめは音のない河を
- 64 冬を去る日々を落として湾は灯の
- 65 冬たちがほほゑみながら灰になる
- 66 目に雲のめぐるあなたを野に遊ぶ
- 67 階段に空気を点し蜂の輪は
- 68 花曇る瑠璃の地方を帆のあらし
- 69 風を木のながれて春は飴色に
- 70 玻璃の托卵春を十三年まはり
- 71 緒の浜へなかばの書架が流れつく
- 72 虹彩は花のからだを濾過そして
- 73 巻きもどる雨はひかりの鱒を出し
- 74 糸車花の終はりを藍が掃き
- 75 色のうみ泪が鳥を変はるまで
- 76 喝采を傘の四月を火に閉じる
- 77 夜の塔花粉まみれに名を灯し
- 78 蜜蜂よ草むらは揺れながら火で
- 79 目には水銀川に実れば鱗族(りんぞく)の
- 80 風切の手を裏返し春をまた
- 81 陰のぶあついどれもが桜だつた日の
- 82 雨に名は流れ青葉に鳥がゐる
- 83 然りながら蚊帳はうつろの牯嶺街
- 84 夏炉からおよぶ景色を銅の錆
- 85 壺の線つづき故宮は瓜の季へ
- 86 野は草矢飛び交ふ後宮があつた
- 87 ゆめぎはのけばだつ湖をとほく犀
- 88 虹は球体もとの魚の晴れとなり
- 89 すべりつつ鴨来る夏の博士たち
- 90 繭は夜をつなぎあはせて花だつた
- 91 垂れて木は郵便的にうつくしい
- 92 星の褪色みづに晒して骨は傘
- 93 うつろ野に鳥を散らして白夜の手
- 94 名の海は遠いわたしを噴水し
- 95 声は水 渡る鏡を昏くなる
- 96 現身の巻かれて虹に手を離す
- 97 波と火の十六月を歩く鳥
- 98 降るのは礫(れき) 月日の皮膚を感光し
- 99 藻の瞼その電葬(でんそう)のあなたたち
- 100 光年の弾に崩れて次の火へ